
異世界少年

バード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界少年

【Zマーク】

Z2595W

【作者名】

バード

【あらすじ】

とてつもないチート能力もつた主人公が圧倒的に無双するはなしです。

ZOシリーズ、決して面白くありませんが暇つぶしにさえなれば幸いです。

なお、投稿間隔は保険として3週間以内となっています。（11月29日現在）

トランプの面白い空間（前書き）

投稿はとってもないほど不定期で文章少ないです… そりんとソーマー承の上でお読み願います。

テンプレ的な白い空間

「…」

気がついたら白い空間の中

これってテンプレ的な？

神出て来たりしませんよね？

「それが出てくるんだもんなー」

「は？」

「は？とかいへる神でも傷つきますよ？」

おれの目の前にいるのは小4ぐらいの背丈の少年。

いや、こんなの神だつたら驚くだろ。

「そんなんはないよ。んで取りあえず本題に入るよ。これからきみには異世界にいってもらつ。」

「え？何故元の世界じゃないんだ？」

「自分が死んだこと覚えてないの？」

ああ、そうだ思い出した。通り魔にあつたんだ。んで心臓をサクリツと殺られ…た？

「そう、一度死んだら元の世界に帰るには

記憶や姿など全て捨てて赤ん坊から転生するしかない。まず普通の人なら自動でそのままこの手段で転生されることになる

「なら神に会つてゐ俺は特別か」

「うん。ぼくの手違いで死んだからね」

サラリと言つてくれるじゃねーか

「言わなくてもいっしょだからね。まあそれで異世界へ転生をせるということ

「なる程」

「んでお約束の能力？特典」

「まつてました！」

やつぱ叫ばずにはいられない。

「うん。んで特典から先言つよ。ひとつめぼくとこいつでも話せるようになる。」**「ツドチャシトと念じればこいつでも出るよ」**

そのままだな。まずいつでも出れるほど神は暇なのか？

「つつい。特典一つ減らすぞ」

「すみません」

とつあえず平謝り。だいじなものだつたら難儀だし。

「よろしご。2つめ、MP、ギルドと一体化

ギルドと？」

「つまりギルドレベル上げればMPも上がるところ」と

なるほどなるほど

「んで能力一つだが強い」

「それはなんだ？」

魔法全部つかえるとか？

そんな願望は次の言葉で叶えられた。

「思つたことが実現または思つた事をする」**「どができぬ」**

なんじやこのチートぶりは！！！

「ただし、チートすぎなぶんリスク？」**「メリットがある」**

そりやそうだな

「どんなんだ？」

「1つ、MPを実現したことと同じぐらい消費する」

そりやしかたがない

「2つ、出来事は実現出来ない」

当たり前だな。できたら世界崩壊される。

「3つ、人を一発でたおす魔法とか、金を作つたりする」**「とはでき**
ない」

これも元々する気無い

「んで？」

「以上！異世界逝つてらつしゃーーー！」

なんか何気なく字が違うー…と思つたら、

ノガラ

卷之三

まあ、そのまま落ちていつた訳ですよ。

トランプの白い空間（後書き）

つまんなこ」と前題で読んでやつてください。M

「まずは落下をとめよ。後はそれからだ」

「ここで俺は、飛べる魔法を使つてみる」とした。

「やつぱ飛ぶなら風だな」

「とりあえず強い上昇気流をだして浮かぶ」とした。

「シコン、ボオオオオオオッ！」

一瞬体から何かが抜ける感じがすると同時にトトから物凄い風が吹いてきた。

その風は、俺の落下を止め、ゆっくつと俺をおろしていく。

「。〒# ^\$¤`^±# !?」

一方その俺はかぜのせいと喋れなかつた。

（次は加減をしよう……）

そつ心にちかう秀一であった……

それから3分くらゝして俺は草原に着陸した。

「よし、このチート技練習しよう」

そういつて始めるよとした時聞き覚えのある声が頭に響いた。

…あのチビ神だ。

「チビは酷いよ！チビはーー！」

本当のことだもん。んで、用件は？

「本当のことって……まあいい。んで用件ね。言えればこの世界での

注意点

「ああ、そういうや聞いてなかつたな。んでどんなだ？」

「一つ、技の名前ぐらゝは使つとき言つてね。この世界で無詠称するがあやしまれて最悪捕まるから。捕まつたとしてもぬくれるだらうけどきをつけて」

「面倒事きらこだしきを付けよ。」

「二つ。一気にレベル上げないで。他の人の目につくから。そして

最後、後ろ敵いるよ？」

「なっ！」とうしろむいたらでっかいキノコがいることに気づくまでからなかつた。何時の間にか通信されてる。あの臆病者め。まあ、まずは…

「こっちを殺りますか！」

キノコVS秀一の戦いかはじまつた。

チート練習1（後書き）

DUHEでうつしてあるひとつってほかいるかな？ いたら一言コメントしてくれ
さい！

誤字修正しました

チート練習2（実戦）（前書き）

即、決着します。

チート練習2（実戦）

このキノコの化け物はハラブといいうらしき。何故分かつたかは、少し、「名前なにかなー」とか思つたら勝手に出てきた。まあ便利だしいいけど。

とりあえず前のキノコをどうしようか。

一応植物だし焼いてみるか。

「ファイヤー！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

あ、強くなりすぎた。

「グギシャー！！！」

ハラブは一瞬にして消し炭になった。

「ハハのようだ！」

そつおもつていたら急に炭がきえた。

そして消えたとどうじに黄色い粉がすこしひつた袋が落ちた。

「モンスターを倒したらドロップアイテムが出るのか。剥ぎ取らなりでいいしいいな」

とりあえずその袋のなかの粉を舐めてみる。なにかしらべるために。

結果、痺れ粉でした

といふかますさわった時から痺れてたし薄々きがついてたけど。

取りあえずこれはもつておく。鍊金すれば武器になるかもしれんし、無理でも近くの町で売れるだろ？。

といふかまず町いかんと始まらないし行くか！

マーク練習2（実戦）（後書き）

おこてる最中の話は2〜3話になると重なる。

鍊金しよう！

さっきいた場所から5km位歩いた所で日が暮れた。ここまで来ると20体程モンスターが来たが、残らず燃やした。なかにはノッポとかいう木の化け物もいたがぶっぱなした。ドロップアイテムは蜜や木の枝とか、ちなみに全て頂いた。木の枝なんか見かけの割に耐久力がつよいもん。

そんなこんな合って今は夜。テントを作り出して張つて、光の魔法で周りを照らし障壁を張つた。

「完全防御一丁上がり」

これでこちらのモンスターは襲つてこれないだろう。さて、いまからしたいことがある。それは、鍊金術だ。材料も集まつたしやつてみようと思う。

「まずは剣だな」

秀一はまだ武器をもつていないので剣を作ることにした。

「材料は木の枝と痺れ粉でいいかな？」

そういうて秀一は痺れ粉と木の枝に触れた。すると、

バチッ！バチバチバチ！

火花がちり同時に一本の剣が出てきた。そして、

>電木刀が出来ましたく

どこからともなくそんなメッセージが出てきた。というか「誰だよ！」って突つ込みたい。

そこはおいといて、この木刀、たしかにすごい。なんと刀に触れると痺れるのだ。意外に凄いとおもう。

今日はこれ位にして寝た。

錬金じゅうじ（後書き）

Wアップして見ました。

乱入試合（前書き）

また、一瞬。そして、短いです。

乱入試合

朝になり、すぐに気づいた事。

「食いもんがねえええええええええええええ！」

でもドロップアイテムの蜜があつたので喰う。

バクッ

「おえ～～～～～～～～

… まず過ぎた。

でも案外腹一杯になるしつか。

それから10分後：

1kmほど走つていまいが… ちょいとやりすぎたか。

前には粉々になつたモンスター（ゴミ）と、横には啞然とした少年
がいる。

なぜこうなつたかは見当がつくとおもつが30秒ほどとかのぼる。
俺が疾走していたときのこと…

ダダダダダダダダダダダダダダダッ！

俺は忍者よりも速く走つていた。

「あ～暇だ～なんかねえかな～」

そんなことをいつていると人影が見えたので、話しかけようとして
その人の状況を知つた。

そいつはボロボロで所々に切り傷があり、それに付け加えるモンス
ターにかこまれていてる所だつた。

話を聞きたかったので面倒だが助けることにした。

… それからは言わずともわかるまい。

まあどうあえず…

「おーい、きこえてるかー？」

少年から話を聞く事にした。

「の世界の事（前書き）

仲間が増えます。

あれから5分…

呼びかけている内に少年が怯え始めた。

：何故に？

10分…

イラついてきた。
まだ口を開けない。

20分…

「お～い」

「……」

相変わらず無口な少年。

30分、40分、50分、

「話を聞かせて貰えないかな？」
「……」

プチッ

「話を聞かせろっつってんだろ糞ガキがあああああ～！～！」

そう叫ぶと同時に木刀をふりかぶる。

「わあっ！分かりました！話しますから武器を下ろして～～」

「最初からそうすればいいじゃん」

俺は武器を下ろして質問を始めた。

少年の話に寄ると、この先の国は王がいる王国でイースグラルという国で、とても治安が良く犯罪が起こったことがないらしい。そして他の国とも戦争が起こった事もないらしい。

…まさに平和な国だな。

んで自分は奴隸商人に売られる所でモンスターに見つかりおとりとして馬車から放りだされたのだと。

それともう先に俺が異世界からきたことは話してある。最初はそれこそ信じて貰えなかつたがそこらの実を拾つて鍊金の応用で一瞬で回復薬作つてやつたり、酸素だけを圧縮して酸素玉を作つたりして人外過ぎる技をみしたら信じて貰えた。まあ信じて貰えないならあのチビ神をだすまでだが。

んでいまだが…

少年に追つかけまわされてる状態。

少年曰わく帰つてもすむところがなくてモンスターを一瞬で叩き潰した俺に仲間にして貰いたいんだと。

んで今に至る。

んでこの少年が怖いのよ。

ビッシャアアアアン！…！

雷の魔法をうちまくつてくるのよ。しかも威力が強くてさつき背中にかすつたがかすつたところから徐々に焦げ始めたんだ。

そこは水で止めたけどまともに当たつたら

ひとたまりもない。とりあえずここは折れてやつて止めるか。

「分かつた！分かつセビッシャヤヤアアアアン！から止めたビッシヤヤヤアアン！」

「えつ本当ですか！？ありがとうございます！」

よう聞き取れたな。

「僕はアルム、アルム＝アランといいます。宜しくお願いしますー。」

「いっちは尾崎秀一、秀一で、宜しく」

「うしてすこしきみな少年が仲間に入つた。」

「世界の事（後書き）」

ついでに國に着やめ。

王国イースグラル

あれから10分ぐらいして2人はイースグラルに着いた。

いう。また、ギルドもあり、冒険者も多いそうだ。

「それ、まあまあ行きますか！」

そこでですねお金を稼ぐにはそれか一番ですし、なにより秀一は

「……」
「…………」
「…………」

「カニーハイドロゲンオキサイド」説用

よ
り
か?
一

「お願いします」

100

■
■
■

■
■
■

10

■
■
■

アランになるとギルジの世界にいくつもあり、ランク制になつて
いGからF、E、C、B、A、AA、AAA、S、SS、SSSにな
なつていて、クエストをこなすとあがつていくんだと。ただしクエ
ストでの責任は全て自己責任で、クエストに失敗した場合は報酬金
の1割を払うのが原則なんだって。

ケエストの種類は主にモンスターを討伐する討伐ケエスト、指定された物を取つてくる採取ケエスト、護衛対象を護衛する護衛ケエストの3種類で3つまでなら一度に受けることができて、自分がつくりたり取つたりしたアイテムやモンスターがおとしたりしたアイテムは買い取つてくれんだと。

「それではござまじょうか」

「ああ、こじうか」

そして秀一はアランの手を掴み…

「ワープ！」

秀一は話をしているうちに千里眼を使い、ギルドの場所を把握していたのだ。

「え？」

シウン

秀一達は一瞬でそのばかり消え、ギルドの前に姿を現した。

「よし、OK、行くか！」

「えええ！なんでギルドの前に…？」

「おーいいぞー」

「まあいつか、どうせ人外なのはわかっていますし」

ギルドのなかは見かけの割にひろいところだった。

「アラン～登録はどこでするの～」

「その2番の所です。行ってらっしゃーい…といいたいところですが登録にはお金がかかるので…なにか売れるものはありませんか？」

「うーん、んじゃあ回復薬を売つてくるよ」

「わかりました。売るなら3番ですよ」

「分かった。いつてくる」

秀一は3番のところに歩いていった。

「すみません、これ作ったものですが売れますか？」

そういうて秀一がだしたのは4つの球体。

「はいはい、この薬ですね。何薬ですか？」

「回復薬です」

「わかりました。ではすみませんが試し飲みとして一つ頂きますがよろしいですか？」

「わかりましたいですよ
「はい、では少々おまちください」

1分後：

「お待たせしました。3つで150イルになりますが宜しいですか
？」

さきにアランにきいておいたんだが、銅貨一枚10イルで、銀貨が一枚100イル、金貨

が一枚1000イルで、白銅貨一枚10000イルで宿屋が一泊50リルのところからみると1リル＝100円の計算になる。
だから150リルは1500…0円の…計算に？

「そんなに効力が強かつたのか！？」

「はい、大怪我をしていた人に食べさせて見れば傷があつという間に塞がりました！」

「そうか…分かつた！これでいい

「はい、では150リルになります。ご利用有り難う御座いました

！」

俺は150リルを持ちアランのところにいった。

「何リルでうれましたか？」

「…3こで150リル。大怪我の人が飲んで一瞬で治つたそつだ

「ハア…本当にあなたは人ですか？」

「人だよ…！」

「そうですか…取りあえず、

今日はおそいですし宿をとりましょう

「そうだな」

とても呆れられた。何故だ？

5分程歩いて「暮連」と看板にかかれた宿についた。

「アラン、宿つて長期滞在とかできる?」

「できますがどうしてですか?」

「しばらへほこの国にいるつもりだし」

「わかりました」

そうして俺達は宿に入つていった。

「おや、いらっしゃい。宿泊かい? それとも食事だけかい?」

「宿泊で、あのう長期滞在できますか?」

「できるよ。それなら1日2食付きで一泊30リルだよ」

「じゃあまずは4日で120リルで」

秀一は女将さんに120リルを渡した。

「毎度! 部屋はこのわきの103号室だよこれはカギだよ。んで食事は2回までなら言ってくれれば作るよ。ただし3かいいじょう食べる時はお金がいるからね」

「分かりました。では早速夕食一人前お願ひします」

「あいよー!」

まずは夕食を食べることにした。

王国イースグラル（後書き）

次はクエスト行けるかな？

鍊金つみかー2（前書き）

鍊金を沢山します。

夕食を食べた後俺たちは部屋にまいった。

部屋は個室だが広く、ベッドがひとつおこりあつてひともゆつたりと出来る造りになっていた。

「アラン、いまから錬金をするけどみんなか？」

「錬金？」

「そつ、物と物を組み合わせて武器とか道具を作るんだ」「錬金と似たような物ですか？」

「うーん、まあそんな感じ。それを俺は手しか使わずにやる」「錬金を手だけですか…すこし見してくださー」

「んじや実験として空気でやつしてみよつか」

「空気はできないでしょー？」「うーん

「それが出来るのさつー！えいつー！」

秀一は何も無い所にてをだして魔力を出した。するとてを出した所に白い翼が浮かんでいた。

「えええつーほんとこでできあがつてるー！」

「んでこの翼はライアーウイングといつてすーしの間空を飛べる物だ」

「へえー少し使わさせて貰つていいですか？」

「いこよ。んじや背中に翼を着けて」

「いひですか？」

アランの背中に翼がつけられる。

「いこよーじやあ背中に力を入れてジャンプしてー。」「いひですかー！」

アランがジャンプすると同時に翼が光り動き出す。

「わーわー飛んでるー本当に飛んでるーーー！」

「おおー一発で成功させたかうまいねえ。でももう少しあと降りた

方がいいよ？」

「なんですか？」

「だから…もうおそれたか」

「なにが…ワッ…！」

アランが頭から落ちた。

「うー」

「これは試作品、短時間で効果が切れて消えるんだ」

「先に言つてくださいよ～いつててて」

「ごめんごめん余りにもはしゃいでいたから」

「～～～つ…！」

「とりあえず続きをやるべー」

「次は何を作るんですか？」

頭にでっかいタンコブをこしらえたアランがいつた。

「次？次はアランの武器

「いいんですか？」

「いいのいいの、なんでもまずここからすきなのを選んで」

そう言つて秀一は鉄くずと木の棒をだした。

「んじや鉄で」

「わかった、次はここから選んで」

そういうてだしたのは、麻痺袋、水袋、火炎袋、色の付いた石を5つほどだした。

「このいしは魔石ですね」

「魔石？」

「はい、中に各属性の魔力が込められています」

「なるほど、んでどれにする？」

「この電気の魔力が込められた黄色い魔石にします

「よし、んじやそれ貸して」

「？」

アランは不思議に思いながら魔石を返す。

「んじやいっくよー」

バチバチバチバチ！

火花が散りそれから一本の剣が出てきた。

>電仁刀が出来ましたく

というメッセージと一緒に。

そしてこの刀のステータスをみてみた。

電仁刀

威力150

切れ味100

属性 電気

魔法 1・エレクトリック 2・エレキボール

魔法が込められているみたいだ…

とりあえずアランに聞こう。

「アランー剣ができたんだが…武器に魔法が込められているということはよくあるのか？」

「ありますよ。魔石を使えば100%付きますよ、何という技ですか？」

「エレクトリックとエレキボールというんだが…」

「聞いた事がありませんね…使って見ますそう言ってアランは窓を開ける。そして剣をななめ上に上げて「エレクトリック！」と叫ぶ。すると剣が光つて電気をまとい始めた。そして3分位してようやく帶電が消えた。

続いて「エレキボール」と唱える。すると剣先から握り拳の一回り大きい位のサイズの電気の球が発射された。

結果 大成功

ほかには鉄と火炎袋で火炎剣も作つた。火炎剣を装備し、電木剣はうることに。

他にはムミの実と蜜で携帯食を作つたり（味はない。無味だもん）酸素玉を10こつくりつたり…

今日作った物 箇条書き

携帯食 × 3

ライトイ・ウイング (試作品) × 20

酸素玉 × 10

火炎剣 × 1

電仁刀 × 1

水流刀 × 1

HP回復薬 × 10

MP回復薬 × 5

こんなもんですな。

これで残りの材料は…

木の枝 × 3

麻痺袋 × 2

火炎袋 × 1

魔石 × 4

空気? 酸素 × (こ)れからは省略)

石こり × 5

こんぐらいですか

「さて材料ねーしもう寝るか」

「いいですけど…研石忘れてますよ?」

「ああ、そうだそうだ忘れてた。作つてから寝よう」

それから研ぎ石を作つてから俺はある実験を始めた。

「なにしてるんですか?」

「切れ味が0になつたらどうなるかの実験」

「へーえ、でもどこを斬るんですか?」

「透明な障壁で作ったかかしに色を塗つたもの」

「障壁をかかしの形にしてそこにペインの実を付けた物だ。」

「よーし、それじゃあ行つてみよう!」

「ガソリガソリギンガソリギンガソリ

「90…80…70…60…」

切れ味が障壁を斬るたびにへつっていく。

「30…20…10…0！」

錬金じょひー2（後書き）

ポキリ…

切れ味が0になると剣が折れた。

「うわーこりや気を付けなきやダメだね」

「研石がなきや武器が壊れる所だつたでしょ?」

「ああ、そうだな。でももうそろそろ寝ないか?」

「そうですね、寝ますか」

そうして2人は寝た。

次こそギルドです!

これ、クエストへ！（前書き）

この小説が短い訳は活動報告にあります。
正直言つてつらいです。

これ、クエストへ！

「うしー！登録終了ー！」

「お疲れ様でーす、これからクエスト行きますか？」

「行こーうか、金が無いし」

さて…ここまでの経緯を順番に言おう。

1、朝、（暁）

二人揃って寝坊！！急いでワープしてギルドへ。

ちなみに朝ご飯は携帯食料ですませた。すぐに食べれて腹も少しは膨れるしね。

2・ギルド到着、中に入つて手続きを始める。

んで手続きしててわかった事、この国の言語が日本語とそっくりで横文字や漢字もあつたのでとても助かった。もし違つたら字を読んでもらうという羞恥プレイになる所だった。

3・ギルドのルールを教えられそうになつた。

あのままいつてたら2時間は軽く話してそうだ。あらかじめアランにきいていてよかつたと本当に思つ。

4・水晶が出てきて血を要求された。

んで腕を少しばりで刺して血を垂らしたら

水晶が光り始めた。そして水晶の中にBの文字が浮かび上がってきた。聞いてみるとこれは最初のランクを調べるもので調べたい人の血を垂らすとそのひとのランクが分かるんだと。そうしてギルドのとうかくは終わり。らくでしたー！

んで今だが…

アランと一緒にクエストを選んでいるところで、ちなみにアランのランクはCなんだと。近いランクで良かつた。

「秀ーーこれどうですか？」

そういうてアランが指差していたのは

討伐対象：アクアドラゴン

報酬：銀貨50枚

報酬も申し分ないしこれでいいか。

「うん、まあいいんじゃない?」

「ではこれにしおしおう！」

そこで一人はエヌ上級のため4種の窓口に向かうた。

「おー、アクアギアロシ村戸ですね。では一の宛合

۱۱

「これに？」

「その腕輪は眞実の腕輪といいまして、クエスト中に討伐した
かを自動で記録してくれる優れ物です」
まあモンスター倒したらアイテムになるし複製される可能性がある
からな。

一
分
か
た

はい 大矢元三郎は川合川喜原にいるで ご正道をお祓いします」

そうして窓口の人に営業スマイルで送られたあと俺達はすぐには草原にいかず武器を揃えに武器屋に来た。

「そう、俺、尾崎秀一はチビとかお子様とかいわれるのはとてもタブーなのだ。前の世界でも「やーいチビ」とかいう奴殴つて病院送りにしたもんなあ……」

めっちゃ怯えてる。まあ許したるか。

「分かりやいいんだ」

「す、すみませんでした……」

「ただしぬべつたらそのときは……分かつていいよな?」

カクカクカクカク

店員はロボットのように凄い勢いで首を縦にふる。余程怖かつたんだろう、しつこちびつてやがる。

「よろしい。さて、アラン、武器なんか買おうぜ」

「そ……そうですね」

あれ? なんでアランが怯えてるのかな?

「あの……」

「なんだ?」

「秀一って元の世界でもこんな性格だつたんですか?」

アランが微妙にふるえながらきいてくる。

「ん? まったくおなじ。いつてきた奴は3秒でみんな氣絶させた」

「……」

「さう」怯えられた。酷い……

きを取り直して。武器をかうことにした。

俺は買う必要はないけどザインの参考に。 (鍊金ですぐ作れるしね)

後は……

「ここの金屬の余りとかくず鉄はないか?」

「ひやつ、あ、あります。……が何に使うんですか?」

かなりびくつちゃつてるわ。だめだ、こいつ。

「それは内緒、金がかかってもいいから全部くれ!」

「分かつた、じゃあ少しまつてくれ」

元の態度に戻った。流石は武器屋の店員。

ドッスーン!!

それから3分ぐらいしてカウンターに3つの木箱が積み上げられた。

「こつから銅、鉄、ミスリルとなるが？」

「よし、いくらだ？」

「この量だと銀貨5枚ぐらいが相場でしきうな」

「分かつたそれでいい。後これからくず鉄がでたらいつてくれ、種類や量によつては高値で買い取るからな」

「分かつた！まいど！…」

「秀一、これかつてください！」

そういうつて出してきたのは一本の長剣。

「すまん、これも買う」

「おう、ああ、これなら一本銀貨15枚だがさつきの無礼もあるし一本12枚にまけてやる」

「よし、それでかおう」

「毎度…！」

ござ、クエストへ！（後書き）

「おーいアラン、次、次！」

「あっ、はーい」

少しクエストいくまえに色々とよつとくか。

クエスト出発は少し掛かります。

装飾品廻くー！（前書き）

一つ一つかくのがとてもつらー。

HELP!! PC!

装飾品屋へ！

ダダダダダダダ

土煙を出しながら秀一達が向かつたさきは装飾屋。

ズザアアアアアアアアアア

盛大な土煙と音を出して秀一達は止まつた。

「よーっと、ここが装飾屋か？」

「つと、はいそです。ですがなにを？ お金あるんですか？」

「あるぞ。ほらよ」

ジャラン

秀一は銅貨がじつさり入つた袋をアランに放り投げた。

「わつ！ わわつ！ これは！？」

「銅貨がそんなか1000枚程はいってるからよ、すきなのいくらでもかつてこい」

「1000枚！？ こんなにいいんですか！？」

「余つたらくれてやるよ。その代わり買った物見せて」
この銅貨は鍊金術で作つた物なので秀一には実際、材料分は他の物作つて売れば損失はないのだ。なのでこんな余裕をかましているのだ。

「わかりました！ ではいってきます！」

「行つてらつしゃーい」

アランは店のなかへはいつていつた

さて、秀一は

「よし！ あれ作つてみるか！」

秀一はあるものをつくることにした。

「みられるにやばいし亜空間作つて入つて作る。アビス！」

ブーン！

秀逸が亜空間を想像すると秀一はそのばから消えた。

シヨン

そして紫色の亜空間のなかに出現した。

「よしつ やるか！」

バチイ！バチバチ！

ほんの一瞬でそれは出来上がった。

秀一の手の平にあつたのはあの有名な青狸の時を止める道具
そう、タンマウォッチである。

「うし、出来たあ！早速つかってみよう」

そうして秀一は亜空間から出て元の場所に戻つた

幸いそのときには人はいなかつたのでみられるることはなかつた。

「よーしつかうぞー、時よ止まれ！」

カチッ

ジユワーン

時間が止まる。

「おーっ成功成功。もとに戻そつ」

カチッ

シユーン

時間が進みだす。

「おーっタンマウォッチが出来た！」

：：：

それから10分後：

アランが戻つてきた。

大きな袋を引つさげて。

「こんなにかつたのは久しぶりです！」

「そうか、品物をみして」

「はい、でもなにするんですか？」

「鍊金のデザインだよこの世界のデザインってもんがあるだろ？」

「成る程、変に思われますもんね」

「 せつまつ事。見せて貰つよ」

：

装飾品は主に指輪やブレスレットになつていて、ブレスレットの場合石が皮膚に直接ついているため効力は高いがすぐに使いものにならなくなつた。

指輪ははなれているのでその逆の効果だつた。

「 またつくつてみるか。もういよいアラン」

「 そうですか、ではもうそろそろいきませんか？クエスト」

「 そりだないくか！」

秀一達はクエストに出発した。

今回は特に短かつたですねー

もつと長くしなきや（汗）

只今までの登場人物？装備？モンスター（前書き）

クエスト出発までの登場人物。これまた短い。

只今までの登場人物？装備？モンスター

尾崎秀一

14歳？男

神のミスで死に、ほとんど強制的に異世界転生させられた何とも不幸な男。

いまはアランと行動している。

とても背が低い。なのでチビとかお子様とかはタブー

装備

火炎剣

>ステータス <

属性

火？切断

切れ味

250 / 250

スキル（特性）

火耐性アップ？火属性魔法威力微量アップ

道具

タンマウオッチ

時間外を止める、しかし30秒まで。5回程使うと壊れる。

アラン

13歳？男

本名アルム＝アラン

奴隸商人に捕まりうられに連れていかれる所でモンスターに遭遇しておどりに使われ死にそうな所を秀一に助けられ仲間になる。いまはこの生活をエンジョイしている。なかなか活発な性格で裏は魔法を連発してあばれる魔法狂。

装備
電仁刀
でんじんとう

>ステータス <

属性

電気？切断

切れ味

300 / 300

スキル

スピードアップ？電気ダメージ半減？全電気威力アップ

魔法

エレクトリック？エレキボール

武器屋の店員

いつも強がり。秀一のタブーをいつたため災難にあつ。実は滅茶苦茶チキン（弱虫）

宿の女将さん

性格は優しくとても親切だが裏では怒りを表し調理器具で殴りまくる。とても少年が上手。

神

通称、チビ神。秀一を異世界に送った張本人。馬鹿にされると怒るがそれまでで、そんなに怒らない性格。実は下の位の神なのでそんなに世界を司っていない。また、信仰されても無い。その事でちょっと凹んでいたりする。ちなみに男。

モンスター

バラフ

きのこのモンスター。ざこいが毒をもつていて甘くみでいると痛い目にあう。

ドロップアイテム

麻痺袋？毒袋？きのこの胞子？地魔石

ノッポ

木のモンスター、こちらは完全に弱く木の攻撃も全然いたくない。一応植物なので火で攻撃すると一発で燃え尽きる。

ドロップアイテム

苦甘い蜜？木の枝？木の皮？風魔石？木の葉？カイフクの実？ムピーの実？ハレツの実

ハラル

火を纏つた巨大なムカデ。水をかけると火が消えてきて消えると死ぬ。打撃を与えるさいは水をつけてないと火傷する。通称、火虫。

ドロップアイテム

火炎袋？火魔石？地魔石？火虫の皮

予定変更！！

…つと、クエストにいくまえに…
「ライトウイングに風魔石を鍊金して…」
バチバチバチ！

>風帯の翼が出来ましたく

「鉄と火炎袋を鍊金して…と」

バチイ！バチバチ！

>ターボブーツが出来ましたく

「最後は銅と火炎袋で！」

バチバチバチイ！！

>ブロンズボムが出来ましたく

…よし！

「アランーいくぞー」

「はーー！」

「あとはこれとこれ付けて」

「？これは緑色のライトウイングと…靴？」

「そう。そのライトウイングは改良版。前の2000倍は軽く飛べ

るだろう。靴はお楽しみ、だ」

「なる程、ではいきましょう！」

「ああ！」

二人は飛び上がり、羽を動かす。

「よし！こつからだ」

「？こつから？」

「まあ見てろつて、ポチッとな」

「ポチッと……」

ボオオオオオオオオオオオオ

ター ボブーツが火を吹き始め…

ドッカアアアアアアアアン！！

ジエット噴射をし始めた。
ビュュュウウウウウウ！

その速さは音速を超える。

「-----！」

「-----！」

… そう、喋れないのである。（正確に言えば喋れるが聞こえないの
だ）

1時間ぐらいして…

スピードを緩める。

「水辺が見えてきたしさうそろ降りるぞー」「
はい！」

-----アクアドラゴン発見-----

「降りてそこにドラゴンって…」

「やばすぎますね…」

そう、今一人はアクアドラゴンの前におりちゃたみたいで…
「グオオオオオオオオオ！」

雄叫びが挙がる。このままじゃ確実におだぶつだし田立つと騒がれ
たり固まられるし… まずは、

「喰らえ！ ブロンズボム！」

そういうつて秀一は爆弾を投げる。
ボオオオン！

あー…火力がたりなかつたな…

めのまえには無傷のドラゴンがいた。

「つーん「少しのいて下さー…」ああ…」

後ろにいたのは気合いで溜めたアラン。

オーラが漂っているのはきのせいだらつか？

「エレクトリック」

剣に電気が蓄電され黄色くなる。

「電撃破！」

剣から無数電気の刃が飛ぶ！

「アラ…」
「アラン…」
「えええ…」
「おお…」
「ああ…」

「アラン…」
「アラン…」
「アラン…」
「アラン…」
「アラン…」

刃は残らずドラゴンに当たつていたが…まだまだ無理か、ステータス

見たけどHPがまだ4分の1もへつてないな。！そりだ。

「アラン…ちょっとと下がれ！全然弱つてない！」

「えええ…」
「わかりました…やつちやつてください…」

「おお…ライティングボルテックス…！」

「ふらふらする。MPつかいすぎた。

そうおもつて…

「ビッシュヤヤヤアアン…！」

ドラゴンの頭に雷が落ちる。

…ドラゴンの頭が焦げ始める。

「グオオオオオオオオ…？」

ドラゴンがもがき始める。多分とまんないよー水がかからんうちは。
そうおもいながらドラゴンにちかずいてドラゴンの体に深い切れ込みをいれ…ブロンズボムを入れて…
逃げるだけ。

「逃げるオオオオオオ…！」

ボカアアアアアアアアアン…！」

アクアドラゴン、爆死。」
「合掌。

んでアラン、呆然。これどうにかならんかな…

結局そのあと質問攻めにあつたのは言つまでもない。

「よし…かえりましょー…」

「お前、よく考えろよ、普通往復最低4日掛かる所を1日で帰つて

見ろ、それこそ疑われる

「なる程、ではどうするのですか？」

「1つは素材？アイテムの採取。あと1つが経験値を戦つて上げる

「わかりました…が今日はもうねましょ、日が暮れて来ましたし

「 そうだな、テントでも張るか
「 ？」

そのあと俺がなにもないところからテントを取り出してはつて質問
攻めにあつたのは言つまでもなくて…

予定変更！！（後書き）

これから定期的に鍊金が入ります。次も鍊金。

鍊金しよう！③

「よし、いまある材料はつと
「何してるんですか？」
「材料の確認。鍊金しようと思って」
「鍊金ねえ、また見してくださいよ？」
「分かつた分かつた、いま始める」
ちなみに今ある材料

ミスリル × 30

銅 × 3 (ほとんどの銅貨にしちゃった)

鉄 × 10

真つ直ぐな骨 × 20

パワーストーン × 1

ディフェンスストーン × 2

火魔石 × 4

風魔石 × 3

雷魔石 × 5

水魔石 × 6

巨大な水魔石 × 1

地魔石 × 3

光魔石 × 5

闇魔石 × 3

火炎袋 × 3

麻痺袋 × 2

水袋 × 3

氷結袋 × 2

石 × 20

大石 × 5

岩 × 1

…これほど。我ながら沢山拾つたな。

「今日は俺の武器から！アランはちよつとまちなされ
はーい、その代わりいいの作つてくださいよーー。」

「分かつた分かつた」

とりあえず…

今回作るのは銃だ。ていうかこの世界にあるか？

「アラン、銃つてこの世界にある？」

「ありますがあつてこの世界にある？」

なるほど、あるにはあるんだ。んじゃ、ハンドガンを少し改良したものを作ろうかな。

「んじゃ強い銃を」

「こここの最強銃の威力はノッポを2発位ですね、超せますか？」

「余裕！」

バチバチバチ！

「ドロームガンが出来ましたく

できたのはもつところが緑色の拳銃。

「こんな形の銃はみたことありませんね…
すこしなにかに撃つて貰えませんか？」

「すこしまた、こここの銃はどんなふうに撃つんだ？」

「つかたい属性の魔力を込めてトリガーを引くだけですが？」

「うちはあらかじめ作つた金属のたまを込めてトリガーを引くと

…」

パアアアアアン！

テントに小さな穴が一瞬にしてできる。

「弾が出来る」

「これじゃかわせない…」

「当たつてみる？」

「…遠慮します」

「そうだよな、並の人なら心臓当たれば即死だしね
威力が違う…」

「威力が違う…」

「これで最弱ですか？」

— そう、弾によつて威力がちかうんだ。 例えは……

秀一は由に弾を銃に込め、トリガーを引く。

単
ガ
丁
上

二二二
ノルマニ

「これがどうしたて？」田を閉じる」アランは、少しうつむき眼で、さう言つた。

单が皮列

「ああああああああ」

陽光が弾え

暗闇にもどつて、

—おーい大丈夫かー

「ミシカミノカツヒナガニ」が

۸

三十分钟：

卷之三

「うーんと装飾品かなー

「ああーなるほど」

一ノ二で弐三イヌダイレ

100

「このなかからどれか選んで」

「んじゃ ミスリル

「遠慮ないなー」

「悪かつたですね（怒）」

「サー・セン、ではつき」

そういうつて次に出したのは各魔石。

「んじや、電魔石で」

「了解、では最後、どんなのがいい？」

「戦闘の時に邪魔にならなきゃなんでもいいです」

「んじや 指輪ね、ちょいまち」

バチバチバチバチ！！

＞雷光の指輪が出来ましたく

ステータスを見る。

＞雷光の指輪 <

耐久：120 / 120

スキル…雷無効・雷攻撃威力1・5倍

魔法…サンダー・ボルト

無効！？強すぎた！！

「アラン…」

「はい？」

「雷無効って普通ある？」

「半減ならありますけど…無効はありませんよ？」

「これ…雷光の指輪っていうんだが…スキルに無効がつっちゃってるの」

「え？」

「ちょっと来て」

そういうつてアランをテントの外に連れ出す。

「指輪付けて」

「はい？」

アランは指輪を付ける…とそのとき…

「アランよけるなよーー！」

「…？」

秀一から電気の玉がアランに向かい飛ぶ！

「ええええええええええ…！」

ドオオオオオオオオオオン…！

アランに直撃。大怪我をすると思つが…

「え？ え？」

土煙から出て来たのは無傷のアラン。

「うん、無効だ、無効」

「本当ですね…これ貰つていいんですか？」

「どうぞ？」

「ありがとうございます…！」

「いいのいいの、さて、つぎなんだが最後だ」

「なんですか？」

「魔力石をつくりつつと思つ、手伝つて」

「手伝つてつて鍊金じゃないんですか？」

「そうだ、無属性の魔力を石に込め続けるだけだから」

「なるほど、ではやりましょう」

「ああ」

秀一はテントの真ん中に大石を置く。

「では、スタート…！」

「おー…！」

：

錬金じよつ-3（後書き）

魔力を込め始めて30分…

「あー、後頼みます！」

「了解！」

アラン魔力切れ、30分もいけば切れるわな。

1時間…

魔力がまだきれない。

2時間…

魔力2分の1、それでもおおすぎだらうこの魔力。

4時間…魔力が底をつく。

あ、やばい立てねえ。くらくらしてめまいがして吐き気がする。

「立てない…アラン、魔力石出来てる？」

「石が緑色になっています、成功してます！」

「そうか、んじゃねむらしていただくよ、魔力のつかいすぎで気持
ち悪いし」

「分かりました。お休み」

「おやすみ」

そいつって俺は意識を手放した。

起床。予定より寝坊した一人は大急ぎでこれからどうするか決めた。
「今日は鉱石どりにいくぞ！ ほら！ これ発掘用のピッケル！ ほら、
行くぞ！！」

…そり、一方的に。

「秀一！ ちょっと落ち着いて「バッハハーハー！」ちょっと待ってく
ださーい！！」

アランは慌てすぎて「秀一」について行きやるをえなかつた。

「ピコウウウと常人じや決
して追い付けない速さで走る秀一、その100m先に息を切らし、
秀一の5分の1以下のスピードで走るアラン。

「ヒイハアゼイゼイ…待つてくださいよー」

そんなアランの嘆きも悲しく、秀一は止まらない。しかし、アラン
はある」と思い出した。

3分後…

そこには半径2mほどのクレーターの上に黒焦げになり、たおれて
いる秀一とそれを足で蹴りまくつているアラン。どういう事がとい
うと、アランは秀一から「役に立つからもつとけ」とペガサスの靴
を押し付けられていたことを思い出したのだ。そして、靴を履き、
秀一に追い付き、天罰（雷）を下したのである。

そして今、

秀一にO H A N A S H Iしている最中である。

「なんであんたはいつもいつもそそつかしすぎるんですか…？」
「すみません…すみません…すみません…」
…最早謝ることしかできない秀一であった。

10分後…

「ではこきましょー！」

「 おお… 」

秀一は少しやつれている様子。

「 どうにいこうとしたんですか？」

「 ここの地帯の端。岩場が多いと思つて…」

「 でもそこならいぐのに口がくれますよ？」

「 だから… 空からいくんだよ…」

「 時間短縮にはなりますけど3時間以上掛かりますから羽が消えて落ちますよ？」

「 だからこれも付けて！」

「 これは… リュック？ しかも紐付き」

「 その紐は俺がいいよと言つたら引っ張れ。さもなくば命を落とす「 わかりました… ではいきましょう…」

「 おう…」

そういうて二人はバサツと飛び立つた…

2時間後…

秀一が口を開く。

「 よーし、羽を取つて自由落下開始！」

「 ええええ… ？ 死にますよ…」

「 大丈夫、死なん、だから取れ！」

「 分かりましたよ…」

羽がとられる。と同時に斜め下に落下が始まる。秀一も取り、落下を始める。

「 ぎやあああああああ… 死ぬ…」

「 大丈夫、こつからだから、リュックの紐を引けば？」

「 そうします… えい…」

クイックと紐が引かれる。すると、バサツと出てきたのはパラシュート。

「 うわっ… 落下がゆつくりになつた！」

「 だからいつたろ？ 死なんて」

「よくわかりました……」

そういうつまづくと落ちてこく秀一たちは30分位して会場に到着した。

「はーー！」

はい！」

ガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツン
ガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツン
ガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツンガツン！
ほりまくつた、そして掘れば掘るほど鉱石が出るわ出るわ。

ニヤードの手稿

おお一ではしまつて……やいそこの坊主か

だああああああ!! サウサウンエハニニマ!!

禁句を言つた黒鹿な盜賊たるの頭上に干のハンマーが落ちる。

「た、助けてくれ!!」

「我跟那鬼——鬼——我跟那鬼——鬼——」

皆が皆悲鳴を上げる。一人違うが。

30秒にして100の盗賊は皆潰れて息絶えた。そこらには血がべつとり付く。秀一達は高い所に居たため返り血を浴びなかつたが。実はだが、主人公は一度だが前の世界で殺しをしていたのでとくにパニックになることはなかつた。（このことはまた後日）

「…わが」

「さあ、帰るぞー」

「は
い

少しアランは涙みを覚えながら秀一と共にワープでテントに帰る
のであった：

「はこの後テントに帰つて鉱石を数えたのだが…」
「この鉱石、見た事ない…」

そこには秀一がみたこともない鉱石がいくつもあったのである。

「魔石にしているが…アランに聞くか、アランー」

「はーい」

「これなーに?」

「これらは上魔石というもので通常の魔石の2倍の威力?魔力を秘めていて、売り値も上等です」

「ほーうこれ使うと威力が2倍かー」

少し濃い色をした魔石なんだか…本当か?

「よし、じゃあ、試してみるか!」

まず、鉄で試す。

バチバチツボキッ!

失敗、鉄では耐えれないみたいだ。
ではつぎ、ミスリルでどうか。

ハチハチハチ！
「ハチのつねわ」
> 業火の剣が出来ましたく

成功だ。

ミスリルならたえきつた。これで鍊金をしまくれる……！

「アーリーは一昔の出来事だ」

そういうって俺達は鍊金を始めた……

これから威力が桁違いの武器が出来ることを知らずに

卷之三

質問は活動報告より受け付けます。感想からは

受け付けません。ご了承下さい。

鉱石？鉱石？鉱石

さて、材料の整理整理。今回手に入れた石は、

炎獄石	× 2
水流石	× 1
電撃石	× 1
強風石	× 2
暗黒石	× 1
時空石	× 1
重力石	× 1
電魔石	× 3
火炎石	× 4
ライフストーン	× 2
石	× 15
銅	× 5
銀	× 3
金	× 1
鉄	× 10
鉄の剣	× 20
木の弓	× 10
木の杖	× 5
回復薬	× 30
上回復薬	× 5
気休薬	× 10
気休薬上	× 5
小爆弾	× 60
バンダナ	× 40

…後の方の物は血まみれの盗賊殿から拝借した。大量大量。

「では始めます」

「どうぞ」

「今日は何カリクエストはありますか?」

「電気属性の弾と銃が欲しいですね」

「んでは小さい方がいい? 大きいほうがいい?」

「大きい方で」

「分かった、少しまつとれよ」

⋮

「ここから一つ選べ!」

そういうつて秀一が出したのは、石と鉄と銀と銅とミスリルと骨。

「うーん、じゃあ鉄かな?」

「鉄ね、んじや次…」

次に出したのは、電撃石と電魔石と麻痺袋。

「ここから2つ選んで」

「電撃石と電魔石で」

アランは迷う事なく即答した。

「よし! では10秒待てよ…」

秀一は選ばれた材料をかき集める。

バチバチバチ!

⋮ そして鍊金していく。ただし、今回は多いので時間がほんの少々掛かつたが。

「出来た!」

「おおー、では見してください」

「はい、これがロームガンだ。そしてこっちが弾。銃は引き金を引いたまんまにすると連射できる。弾は当たったところから放電される仕組み。なお、その内の一つは超放電弾で当たったところから一時間ほど放電し続ける代物だ、ほれ」

「ありがとうございます」

「いいの、では俺は…」

バチバチバチ!

>獄炎の剣が出来ました<

火の剣でつと。んでステータス。

>ステータスく

獄炎の剣

切れ味… 300 / 300

スキル

火属性攻撃威力アップ

燃え移り

魔法

ファイヤーウォール

オーバーヒート

テンファイヤーソード

ファイヤーメテオ

強いのだったか…

さつきメテオ使つたら炎をまとつた隕石が落ちて来て5 m程のクレーターを作つて消えた。

結果、最強。

「うー…」

今唸つてゐるのはメテオに当たつてぶつ飛ばされた、アラン君。まあ、軽傷だがな。

「がーっ」

「大丈夫かー」

「ぐーっ」

「おーい」

「ンンン…」

「呑気に寝とるーー！」

はい、どうやら大丈夫なようですね。

まあ、まだやることあるし寝ないけど。

まずはタンマウォッチの強化だ。時空石でできるだろ？。

バチバチバチ！！

＞タンマウオツチ改が出来ました＜

おおーこりや強いなー。試してみたんだが30分は止まつたぞ。逃げるのに重宝するな。さて次、手軽に使える攻撃アイテムと。材料は強風石と骨でいいかな？

ハチハチハチ！

よし、試しにポイ、

竜巻いいいい！！テントが飛ぶううう！！

3分程竜巻は起つり続けた… オエッ。気持ちが悪い… 酔つた酔つた。
オエッ。

とりあえず自分にヒールをかけまくる。

魔力がモハヤにはい！」

2 二作る

「ライフルバッヂが出来ました！」

これは外語回復ができるお菓子
能力は元氣回復力
魔力は優れた品だな。…………あ、氣休薬があつたわ飲もう。

ゴクリゴクリ

味は梨みたいな味で甘くてのみやすい、しかも効果がちゃんと出てきてる。いい物拾つた。

よし、最後実験だ。今持っている石を全て鍊金するどどうなるか？

魔力が切れるのはわかっている。でも疑問は思う。たゞ言えども、子奇心つてやつ?まあ、一りあえず今持つていいや。

一つずつ取る。そして鍊金する。

いつもの10倍の時間をかけて出来上がったのは一つの水晶体。

>オールクリスタルが出来ました <

この水晶が秘めてる魔力がはんぱない。自分の5倍はある。んでステータス。

>ステータス <

オールクリスタル

能力

全威力？耐性アップ

代用

無破壊

それなりに強いのばつかだ。しかも壊れないとは…
まあ、魔力尽きたし紹介は明日で寝るか。

卷一百一十一

朝田がまだ10度の所で秀一が起きた。

あ、寝た寝た、でも起きたには早過ぎ……!?あれは……

秀一が見つけたもの…それは盜賊のハンタナで

これは^タ聞に^タ本物とは^タ通^タキレヤ

卷之二

「うーん、どうですか？」

大きな声こよりアラシ起床。

「金がなあああああああああいいいい！」

「ひつ」

大きな声によりアラン気絶。

「ああー！ちよつと、アラン、アランーー！」

■
■
■

なる程、纏めると障壁を張り忘れて寝て いる間に盜賊にはいられ
て金を取られた」と

「すいません！すいすい

「まあ、仕方ありませんが……食べる物があります

報酬金も宿屋に飛び、携帯食料もないからだ。

うん

なんかいい手はありますか?」

「 そ う 言 え ば セ ー 、 イース グ ラ ル つ て 商 業 が 盛 ん な ん だ よ な ？」

「俺の能力使つて店開いちまえば？」

- 材料は? -

- 空間の中 -

「なら金も…

「そのまえに睡魔に襲われた」

「もう…なんと言えばいいのか…」

「悪いー悪いーまあ、取りあえず帰ろー。それからだ」

「はい、では靴を「捕まつて！」はい？」

「いいから！」

「？」

いわれた通り秀一を掴む。

「来た事のある所なら行けるーワープー」

「なる…」

シユン

アランの言葉が言い終わらない内にワープ。そのまま国へ直行。そしてでて来たのはギルドの横。

「つと、ついにいたぞ、入ろう」

「そうですね」

「すみません、報酬を頂けないでしょつか

「はい、では腕輪を」と提示下さい

「はい」

秀一は腕輪を手渡した。

「はい、では少々お待ち下さい…」

「お待たせしました。報酬は銀貨90枚です」

「報酬が多いような気が…」

「シコウイチ様は盗賊を倒されましたね？」

「はい…ざつと100人、襲われたので返り討ちに」

「その盗賊がランクAAで手配されていた盗賊でして…」

「なる程わかりました」

「ではこれが報酬の銀貨90枚です。」利用ありがとウイザードまし

た

アランの所に戻つて…

「店作らないで置こつか」

「え？」

「盗賊倒したからつて報酬が銀90枚に」

「ええ、店作りましそうよ」

「いやいや、意味が」

「作つて作つて作つて作つて作つて……」

呪いみたいに駄々をこね始めた。正直うつせこ。

今俺の選択肢は4つ。

- 1・なだめる
- 2・無視する
- 3・逃げる
- 4・折れる

：：：まず2は却下。うるさいだけ。1だな、いけそうにないが。

「おい、駄々こねるのやめる、みつともない

「作るというまで止めません！」

「やーめーろ」

「いーやーだ」

乗り気だつたんだ、そんなに。

次、3、逃げる。レディ、

「ゴーー「逃がさねえよ?」「痛つ」

足捕まれて顔面から見事に転倒。おーっと、鼻血が止まりません！

これは痛い！！

その後、なだめる、逃げるを繰り返したが、恥と痛みが降りかかり、床と顔が血まみれになるばかり。しゃあない、最後の選択肢使うか。

「分かった！分かったから、足を掴むのと駄々こねるの止めろ！」

「わかりました！ではどこに店を……」

「立ち直るのが早すぎるー！」

：：

あれから店は宿の近くのライール広場ですることに決まった。建物

を持たないで……だが。どうせ違う国行くしもってたら金の無駄使いだしな。

んで、今は亞空間の中で作つている。気休薬を飲みながら。魔力が持たない、疲れる……

「100-！」これでいいだろ……

「いいですよ、ではいきましょうか

「ちょつ、タンマ……」

「行きますよ！……」

「あつ、ちょつ」

そのまま秀一は引きずられていった……

……さて、

「なんで、客がこないんだ！！！！！」

「知りませんよ、そんなこと

人が来なくなつて20分……

店を始めて20分……

「なんで人が来ないんだつ……！」

「だーかーら知りません！」

よし、こうなつたら……チビ神に……

（誰がチビ神ですか……）

（あ、もう出てきた。早いねー）

（だまらつしゃい！！それで用件は……）

（まあまあ、用件は一つ、何故客がこない！……）

（答えは一つ、殺人狂が暴れてるんだよ。ギルドの方に行つてみな、あるよ、あつ、また殺した）

（そいつは殺したほうがいい？捕まえたほうがいい？無視した方がいい？）

（捕まえたほうがいい、あーこの広場に来るよー！）

(了解、そして最後相手の武器は?)

（大剣だ、健闘を祈る！）

通信が切れる、というか祈らんでいいし。

あ、
来た。

店（後書き）

「死ね！死ね！死ね！死ね！！」
ありきたりな言葉を発しながら。

うん、それそうだ。

「さつ、殺人鬼イイイイイイイイー！秀一さん！早く逃げまし…」

「それでは……さよなら」

六〇三

鍵か鍵い音を立て火をふく
腕と足首に。

二二二

再度ボタンが押されると同時に：

殺人鬼の歟末魔か上かる

「無視！ゴー！」

無視しないで！

そんな嘆きは無視して殺人鬼を担いで走る秀一であった。

■ ■ ■

秀一が戻つて來た。

： 一人、客を連れて。

「秀一、そちらはお密だん？」

「当たり…まあ、付いてきたんですがね、勝手にだけど」

「そちら…名前は？」

「あ、そうだ、名前ね、タシムっていふんだ、今回ばかりないと興味があつたんできたんだ」

「タシムさんね、実はタシムさんが一番田の客なんで、名前をきかせて貰つたんです」

「そりゃかいそりゃかい、そりや光榮だ、んでなんかあんのかい？」

「「ありません」

「ありやりや無いのかい…」

「まあ、割引ですかね」

「そりゃかいな、では剣をおくれ、後、

口調を戻してくれ、返つて気持ち悪いよ

「そりゃかいな、んじゃ改めて、何属性がいる？」

「そりゃかい、そりゃかい、水属性をくれ、なかなか見つからなくてね…」

「水…ね、んじゃ、豪水の剣だね、今ある一番強いのは」

「聞きなれない名前の剣だね…見せてよ」

「分かつた、アラン、パス」

「了解!よつと」

「はい、どうぞ」

「おおー、見事な代物だねー、能力は分かるかい？」

「全て分かりますよ、まず水ダメージを半減、火ダメージ軽減、地ダメージ増加。

そしてある程度の魔法なら一振りで無効化します。魔法は、ウォーターアローレイン、激流破、です」

「細かくよく分かるねー、でも魔法はどうやらも聞いた事がないよ、やつて見ていいかい？」

「どうぞ、無永唱でできますので」

「本当?…んじゃ」

タシムが剣を上に突き出すと同時に無数の水の矢の雨がとても速いスピードで辺りに降り注ぐ。

魔法が終わるとタシムはへたりこんだ。

「どうしました？」

「つ、強過ぎるよ……」

「激流破の方が強いですよ？」

「……買つてから見るよ、幾らだ？」

「金貨2枚です」

「意外と安いね……ほらよ」

「毎度！あ、あとこれがこれサービスね、選んで」

「そういうて秀一が出したのはタンマウオッヂとハンドガン。

「この銃……威力はどれくらい？」

「んじやさつきの殺人鬼の手足の穴はこれで作ったといつたらわかれりますね？」

「わからんね」

「そうですか……では」

そういうて秀一はタシムに銃を向ける。

「ちょっと、なにするんだ！？」

「では、これを防げますか？」

「ちょっとと秀一やめといたほうが」

「大丈夫、防げなかつたら即刻回復魔法唱えるし」

「そうか……んじやかかってきな！」

タシムが構える。

「それでは、一瞬ですよ？」

秀一は銃を構え……そして撃つ。

「ガツ……」

タシムは防げなかつたようだ……

「ヒール、はい、勝ちました」

「なる程……威力が半端無いね……体に撃たれた時に撃たれたといふて穴が開いたような気がしたんだか……」

「ああ、それ本当に穴開いたんですよ、血が残つてますし」

「そう言えばあの時計は？」

「あれは時間を止める」ことができるんだ、手を止めなこで」

「？」

ウォッチのボタンが押される。

「あれ？あのアランって子跳んだまま空中で止まつてる……」

「これで分かるでしょ？時間が止まつてる」とが。因みに効果は

30秒間

そのとたん時間が動き出す。

「あ、落ちた」

「どうです？どうぞおじょひづく」決めた」はい？」

「城に来てくれ」

「えつ？な、な、なんで？」

「私はこの国の王だ、だから」」

「？？？？？あつちよつとー。」

そのまま秀一は城に引きずつていかれた…

アランを置いて。

「？？？ちよつ、秀一ー置いてかないでーーー！」

結局アランも城に来る事になつた…

店をほつたらかしていたのでそこにあつたガラクタは全てとられた
のは言うまでもなく…
国といつても難しくあつませんよ。

城に（強制）招待されたー？（前書き）

少しは並になつたー？

城に（強制）招待された！？

秀一の嘆き悲しげ、引きずられ続け、とうとう城に到着。通った道には秀一の血が滲んでいることはいつともあるまい…

只今、血が止まらない背中に治癒魔法を掛けながら赤いカーペット
がひかれた廊下を3人で歩いている所だ。……あー、またカーペット
がさらに赤くなつた……。このおてんぱ姫、おぼえとけよ。

「秀一：大丈夫ですか？」
「これが大丈夫に見えるか？」

卷之二十一

それから3分後：

「背中全快、よし、イツツ? シ=タイム! ててて、てつててー、タジマウオッチー

ボタンがおされる。同時に時間が止まり、秀一以外の物体の動きが止まった。

「さて、フルボッコにしましょうかね……」

それから3分ほど姫は殴られ続け、あとからハレンシヨーに治癒魔法を掛けて時間を動かす。…イライラ発散終了 100はやつたしな。フフフ…

そのあと、そこには痛みでのたうち回るタシムと不気味に笑う秀一と唖然とするアランがいたという…

それから5分、気を取り直してタシム一行は歩き出す。

「おい、秀一！」

「はい？ なんでしょう？」

「私を殴ったのあなたでしょう…」

「はて？ なんのことやら…」

秀一は首を傾げる。

「しらばっくれてんじゃねえよ！」

口調がよく変わったお嬢さんだ。取りあえず、眠つてもらつ「やるつ」としている事がばればれだ」ヘグウ…

脇腹に飛び膝蹴りを頂戴してしまつた。秀一がすつ飛ばされて当たつた壁はたちまちクレーターが出来、崩れ落ちる。秀一と共に。

「ウガアアアアア…！ こんの…！」

「やられたりんか… ウオーターカッター！」

タシムの手から水の刃が連射される。そしてその刃は少しカーブし、秀一の元へ向かう。

「タンマ…！」

秀一はそれをタンマウオッチをつかうことで避ける。そしてついでに殺人鬼と同じように手足に銃弾を打ち込む。そして時間が動き出す…

と同時にタシムが氣絶する。取りあえずヒール使って王のところに引きずつてくる。千里眼で場所分かつてゐるし。あ、アランも。

王の間（自称）に着いた。と、同時に槍が脳天に貫通する。無論俺の…だが。

しかし俺の視界はブラックアウトしなかつた。いわば変わり身の術をしたのである。鉄人形を使つたから相手の槍は粉々に、ボロいな。んで、本物の俺は…

「初めまして、王様さん？」

王様の背後に転移してた。てか、すきありすぎ。

「な、なんと…」

「礼儀がなつてないなあ、入つたら即死つてなあ、アラン…」

「こきなり脳天に槍が直撃しますので即死確定ですね、この国、どうやつて成り立つてるんでしょうつか？」

「同感」

「お、おまえたち、一体？」

「「ただの冒険者！」」

「ただの、か。あ、すまんすまん。わしはこの国の王、ドロス・バランだ。さつきは試してみてすまなかつた」

「試す？」

「どれ程の強さや対応力かをな、しかし想定以上の強さだな、これには少し驚いた。人形を代わりにするとは…」

「なぜ試した俺達を？」

「聞いてびっくりするな」

そのあと、王は衝撃の言葉を発した。

「退屈しのぎだ」

ヒヨオオオオ…

どこかで北風が吹いた気がした。

「ガアアアアアア…なつ、何をする…？」

あつ、なんか無意識に王の首しめてた。あわててはなす。

「し、死ぬかと思った…」

「すいませんね、あ、あと今回の用件はたつた一つでして…」

そういうつて秀一はあばれているタシムを指さした。

「あちらのおてんば姫をお引きとり下さー」

そして帰つて来る答えは…

「断固拒否する！」

「「エエエエエエ…」」

「ただし、わしに勝てたらいいぞ」

「えつと手加減なしで？」

「王と？」

「そうだ、わしに3回勝てたら引き取る、が、あんたらが3回負けたら、姫ごとでてつてもらおう」

「余裕だな……」

「余裕だけはあるんですね……」

「黙れ、誰からだ?」

「俺だ」

秀一が名乗り出る。

「ほう、ちなみに名をなんと申す?」

「尾崎秀一だ」

「では秀一、手加減なしだぞ」

「俺が手加減無しでするとあんたなんか一瞬で殺せると思いますが?」

「ほう、大した自信だな。ではやつてみるがいい」

「では始めます」

秀一は銃を取り出し、王の腹に向け撃つた。

「ガアツ! ?」

見事命中、当たつた所から鮮血が舞つた。

「ほれ、さよなら~」

2発目を撃ち、当てると王は倒れた。普通の弾で急所ははずしてたから生きてた。気絶してたが。

「アラン交代」

「はい」

城に（強制）招待された！？（後書き）

だが王は氣絶している…

「よし、交代」

「？勝つたんですか？」

「お前のときも氣絶してたからな、ま、いわゆる不戦勝とかこいつやつ」

「なるほど」

また交代する…

王が起きない…

「よし、終つい、おら、起きろ敗者」

そういうて秀一は王を蹴る×20

「つだだだ、あれ？ 勝負は？」

王、起床。

「俺が撃つた後氣絶したから不戦勝だ俺達の」

「なるほどそうか… まてよ」

「なにか？」

「秀一殿が使つたのはその銃ですか？」

「そうですよ」

「普通の銃じゃありませんね？」

「自作ですよ、この銃はさきに鉄で作つた弾に魔法を刻んでそれを打ち出すことで威力を通常のおよそ20倍にした物です。まあ、もつとも、さつきのは魔法が刻まれていないただの弾ですが」

「なんと… そだ、その銃、此方で買い取らさせてもらひえるか？」

「金額によります」

「一つ銀貨30枚で…」「よし、アランかえるぞ」「はー！」「ひみつ…ちよつとまいてい！ 分かった！ 分かった！ 金貨一枚でどうだ！…」

「いいでしょ、しかし弾は別ですよ？」

「なんだと… へつ… いくらで売る…？」

「通常弾が100発につき銀貨10枚で魔弾それぞれ30発につき10枚。強魔弾はそれぞれ10発で10枚。爆破弾は5発で10枚。破裂弾が20発で10枚です。銃も含わせそれぞれどの様に買いますか？」

正直こつちは大得をしている。

通常弾は鉄だけでいいので量産できるし、魔弾も魔石があれば100個以上は作れる。破裂弾は布（盗賊のバンダナ）で作っているので。色々と損害がすくなかつたりするのだ。

「通常を500発と魔弾を300発と強を100発。爆破と破裂を20発ずつ。銃は10丁くれ。商売上手め」

「会計は金貨10枚と銀貨310枚。魔弾は属性の希望は？」

「なんでもいい。ほれ、金だ」

「毎度、説明書も付けときますよ」

秀一は金を受け取る。袋がとてもでかく重い。

「これからもなんかあつたらいつてくれ、言い値で買う」

「ありがとうございます。さて、JILLでさよならとこきたい所ですが…アラン、銃バス」

「よつと」

「よし、弾は…風でいいや、GO、TU、THE、HELL（地獄に行け）偵察者と暗殺者さん」

そう言うと秀一は天井に弾を撃ちはじめた。と、その時、天井が壊れ、暗殺者や偵察者が次々落つこちてきてカーペットに赤く大きな染みを作った。

「な…」

「きずいてなかつたんですか？最初から居ましたよ？」

「お前、ギルドランクは？」

「Aですよ？」

「AAAにしてやる、これをギルドに渡せばランクがAAAになる、

その代わりこれからもたまに護衛を頼む」

「了解しました！ありがとうございます」

「ではまたな」

「あ、最後にマジックを見せましょい」

「どんなんだ?」

「瞬間移動です」

「…なに?」

「あなたの背後に一瞬で行きます」

「やれるも「終わりました」なに!?」

背後には秀一が。

「?????????」

秀一とアランは混乱している王を尻目にその場から立ち去った。

只今ギルドに秀一達はいた。

「んじゃわたしてくるわ」

「行つてらつしゃーい」

⋮

今、手紙を渡した。

ギルドの人大騒ぎ。とこつかつるわい。

「うそだ」とか「王の名をつかうとは!」とか「モグロ」とか。

…漸くこれが本物だと気付いたみたいだ。金がざつさり入った袋も
つてくるもん。

「お待たせしました。こちら、金貨10まいとなります。そして秀一さまはランクがAAAに昇格しました!おめでとう御座います!。次はSです頑張ってください。御利用ありがとうございました!」
一方的に話終了。アランと向かう。

「どうでしたか?」

「金貨も貰えた」

「何枚ですか?」

「10枚だ」

「なんて金額…」

「んまあ帰るうぜ今日はちと疲れだし

「そうですね、宿に戻りますか」
そして、宿に戻り、就寝したときそれは起こった。いや、起こされ
た。

ナビ神による精神訓練

「ヤツホー、そしてお疲れ」「
何故お前が…」
「いや～君に言いひ事と伝える事と君を鍛えるために君の夢に入つて
きたんだ」
「ちょっと位寝かしてくれ」
「却下させて貰う」
「…せつて一殴つてやる」
「やれるもんなら？」
「…チツ、いうこととはなんだ？」
秀一が悪態をつきながら聞く。
「この」とはまざこの世界が3年したら壊れる可能性があるといつ
こと」
「え？」
「原因は毎度お馴染み魔王」
「でも普通に…「無理なんだ」は？」
「今回の魔王はモンスターじゃないから」
「え、じゃあ誰が？」
「人間に乗り移ったんだよ、魔王の魂が」
「え…じゃあ誰か分からん…？」
「正解、でも2年半もしたら行動にでる為に表にでると思つ」
「それを叩けばいいのか」
「そうだけど、魔力が君の100倍はあつて体力は200倍はある
よ?」
「とりあえず2年半鍛えるか…」
「そして。そして伝える事、1つ目、君の力が僕を超えちまいま
した」
「?」

「力付け過ぎちゃいました」

「最早人じゃなくなつちまつたか」

「大当たり～、後氣付いた事ない？」

「なにが？」

「髪の毛が伸びない」と

秀一は髪の毛を触る

「本当だが…それが？」

「やっぱね…君、実は創造神様に気にいられたんだよ」

「何故？」

「さあ？理解不能」

「…」

「まあまあ、それで、君に2つの能力を与えちゃつたの」

「1つ目は分かつた、不老不死だらう」

「当たり～勧が鋭いね～」

「あんたらはどこまで俺を人外にする？」

「次のほうが人をかけ離れているよ。神属性でさ」

「…最早呆れかえるばかりだわ」

「神に近づいちゃつたからね、後これだけは言わせて」

「？」

「ドンマイ」

「それ、一番酷い励まし方」

「あらそ～？」

「…」

「…タンマ」

ボタンがおされる。

「…！」

神の動きが止まる。

「畜生が、サウザンドキック」

神に1000発のキックが迫る。

「…？」

全て透き通る。

「ざ～んね～ん、それ幻覚～」

「重ね重ね腹が立つ野郎だな」

「まあまあ、次はボコボコにするチャンスがある」

「？」

「君の力はまだまだ強くできるんだよ」

「それを鍛えるということか」

「相変わらず勧の鋭いお方で」

「んでどんな鍛え方だ？」

「神属性の魔法とか放ちまくつて、僕に、僕も攻撃するけど」

「実践あるのみつて奴か…いいだろ?」

「ではスター、僕はそちらにつとめよー」

「では…」

秀一の右手に黒く大きな鎌が浮かぶ。

「死神の鎌」

「いきなり神の派生！？んじゃあ…」

神は構え…

「クリアシャイン！」

閃光を放つ。

「ちつ…！」

思わず目をつぶる。

「すきあり！」

「つ…！」

背後からなぐられる。

「まだまだ！」

「調子に乗るな！」

秀一は即座に銃に武器をかえ神に向け火の弾を連射する。

「おつと…当たらないよ」

難なくかわされ、

「シャインソード！切断！」

光の剣で切り込まれる。

「バキュームシールド！吸い込め！」

秀一の作ったシールドに当たった光の剣は吸収され消える。

「こりや厄介、シールドブレイク」

衝撃波が飛ぶ。

「なつ！？」

ガキイイインと大きな音を立てシールドが削れる。

「電磁砲！」

削れた所に電気を纏つた鉄球が飛ぶ。

「これで…やられてくれる訳ないか」

「これで死んでたら命がいくつあっても足りない」

「君はいくつももつてるわけだが」

「悲しいことにな！」

飛び蹴りを放つ。

「まあ、そう嘆くな」

軽くかわされる。

「あと一つ伝える事」

炎の球が飛ぶ。

「なんだ？」

それを手ではじぐ。

「君の能力、スキルというものの」

「また、人外スペック？」

お互いが蹴ろうとし、足が交錯する。

「言えれば特性とかいうもの、君は沢山あって任意で発動出来るけど」

白い鉄拳が秀一に迫る。

「例えば何が？」

それを踏み台にして大きく跳躍する。

「攻撃力1・5倍とか、思いつく限り何でも有り」

またそこに鉄拳が飛ぶ。

「んじや、回避力倍加」

秀一がそう唱えると秀一の体がオレンジに輝き、鉄拳を難なくかわした。

「いうんじやなかつた…」

鉄拳がさらに飛び。

「撃墜率30%上昇。今更後悔しても遅い」

鉄拳が全て碎かれる。

「ちつ、ウォール&ウォール、油断はするもんじやねえな」

2重の壁が現れる。

「甘い、ウイングスピア→貫通く」

その壁も風の角によつて碎かれ、そのまま神の方へ飛び。

「あらつ、なら、シールド「分裂、拡散」なに?」

風の角は分裂をし、100位の所でバラバラになる。

神と角の距離は3m、かわせる訳が無い

「ビッグバン！」

しかし、神は爆発を起こす事でそれらをはじく。…が。

100の拳が舞い、そして神を「川ホツー」にした。そして最後の一発で神はノックアウトした。

ひ、卑怯な

「くつそく負けを認めるとか」

「因みにあれ弱気だし、もっと頑張りましょう、ですか」

「アマゾン」

「はらたつ——！」

「知るか、俺はもうかれりたいんだ帰せ」

なり。その方同人たる者たる者は、肉体に反れる最も起きた状態でな

「ハーバード大学の頂点へ」
これがおれの理想だ

「つと戻つた

氣付いた時はいつも起きる時間位、8時ころであつた。

アラハルアリハリ。

「いやー、チビ神と特訓しててー

「まあ、俺をここに転生した張本人。一応仲間といえば仲間なのか

な

「一応は酷い！」

チビ神が実体化して田の前に現れた。

「…どなたですか？」

「神で「チビ神です」お前がこたえんな。つか、チビ言ひつな
2人ともどういった関係で？」

「「ケンカ友達です」」

ハモッた。嬉しくないが。

「どういったご用件で？」

「そうだそうだ何故きた？」

「言えばアラン君にプレゼント。神と会話する魔法、ゴット…なん
だっけ、「チャット、この記憶力〇ガ」黙れ、んで、ゴットチャッ
トね、これ唱えるといつでも僕と会話出来る。手を出して」

「はい」

アランが手を差し出す。

「ほいっ、といいよ」

神がアランの手の甲に魔法をかけるとそこに十字架の刻印が刻まれ
る。

「これでよし、それじゃ頑張つて～」

「おい、ちょっ」

無視して神は消え去った。

「まついいか」

「何が…」「ゴットブリンガー」ぎゃああああああ…!!…!!

秀一が唱えるとアランの頭上6m程から金の剣が降り注ぎ、なにか
に刺さると消えた。アランはそれらをよけつづける。

「よし、分かった、デリート」

剣が一斉に消える。

「し、死ぬかと思いましたよ…」

「わりい、試したんだよ威力などを」

カードとかつくつて使えるかどうかも。

結果は成功だ。これで新しく武器が作れる。

「まあ、クエストでも行こうぜ今日は」

「そりですねいきましょつか」

只今ギルドに来た…が。

ギルド休館日なので今日は換金？クエスト受注？購入は行えません。
「」了承下さい。

…とのこと。ギルドに休館日ってなあ…

「どうしよう？」

「王にかつてもらう物を鍊金しまくります？」

「んじや氣体薬やまほど買つていこう魔力が持たん」

「そうですね、そつしましょつか」

「では、いってみよー！」

「氣楽な人だねー」

「黙らつしゃいーいくぞーー！」

「はーい」

2人は道具屋で氣体薬を50個買い、宿に戻った。

長く出来ない…

畜生。

伏線けしました。次の話が思い付かなかつたので。

アラン暴走

「うわあああ……」

今しているのはカード型魔道具の実験だ。

あつ、黒い手が出てきた。アランつかんで…闇に引き込もうとしてる。よし、実験終了。それじゃ。

「マジックジャマー！」

カードをだし、唱えたとたん手の動きが止まり、崩れ落ち消えた。おお、強し。

「こりゃいい発見。この喜びを無くさないうちに寝よ「何、寝ようとしてるの？」あ、アハ…」

後ろには周りにそれだけで人一人殺せそうな殺氣を放つているアランが機関銃を俺の頭に構えてた。あら、吃驚&HELP！
「さて、ショータイムといきましょうか…」

「えーっと、どこの備兵…」

突っ込みを最後まで言わない内にトリガーが引かれる。

弾の属は風。当たれば体がぐちゃぐちゃにされる事は間違いないだろ？。

… そう、当たればの事。

お忘れではあるまい。秀一の能力の端くれである能力、魔法を無永唱でつかうことが出来るということ…

これを応用する事が出来る事を秀一は知っていた。

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ

銃弾を全て秀一は最低限の動きでかわしていた。その体はつっすらと朱に輝いていた。

…秀一が応用したものそれはスキルである。スキルも魔法と発動条件はほぼ同じである。そこから秀一はスキルを無永唱で発動出来る事に気付いたのだった。不老不死で絶対に死にはしないが、血や肉が飛び散った後は飛び散った肉はそのままなのでアランに対したち

よつとした心使いである。

「さて、銃を置こうか、そしていくつかききたい事がある、とりあえず座つてくれ」

銃を掴み、上に向け指示する。

「は、はい…」

アランが座ると秀一も座る。

いや、へたりこんだ。

「まず1つめ、お前、人を殺した事があるな？」

「コクリとそれを黙つて領き肯定する。

「では…何人殺した？」

「……ざつと、20人です。全て盗賊ですが」

「嘘だ。読心術でお前の心をよませて貰つた所、数千人。殺したのは…何の罪の無い村人等の平民だ。そつだろ？元、殺人狂さん？」

少し間が空き、アランが口を開く。

「…よく、分かりましたね…そつだよ、俺は神からも見放された、追放者だよおお…！」

…やつぱりか。

スキルに狂人化なんもあるし、何よりも武器の使い方が手慣れ過ぎていた。それに、盗賊100人攻めてきた時の盗賊撃退した時大した動搖もなかつたというところからすでに不信感を覚えていた。普通でも100人一瞬で殺したらどん引き、または気持ち悪くなつたりするが、こいつは何もなかつた。

後、今暴れた理由はこれまでの事を思い出した、または我慢できなく感情がはちきれたのだと考える。

後、気になるのはこいつが言つた追放者といつ事。もしかして…

「お前、この世界の奴じやないな？」

「…ああ、ただしお前の世界でもない。俺の国の事を話してやるよ、どんなのか分かりやすいしな」

そういうてアランは話して始めた…

：「いつが話した事を纏めると、

1・元の世界で住んでいた国はタハールという国だった。

2・こいつには嫁と子がいた。

3・しかし、前の世界は戦争が多く、ならず者も多く、自分が家族を引っ張つていかなければならなかつた。

4・ある日、起きた所、銃を突きつけられ、家族を連れ去られてしまった。

5・そのあと銃で殴られ氣絶。氣づけばあの草原の所にいた。そこでモンスターとご対面。襲われる。

6・だけど魔法の存在に気付いたため撃破やがてそのまま盜賊となり、人殺しもしていたが、ある人すきをつかれ、モンスターに襲撃される、そしてやがてこけて追い詰められる。

7・そこに俺が来て、モンスターを撲滅する。少し演技をして。

8・気付けば魔法が使えた、が。威力が半端なので仲間になる。本当はどうどこかで裏切ろうとした。

9・しかし、俺も異世界から来たと分かつて、本当の事を隠し、下心を無くし、仲間になつた。しかし実験等でストレスが限界に達したため暴走。そして今沈められた。

：こんな状態であったそうな。だが俺と違つた点が一つある。こいつは神と会つた訳じやなく、半ば強制的に転生せられた。補助も無しに。何故だ？

「おい、チビ、でてーーー」

「呼び方を直せ、…とりま、こいつの転生原因を調べるというのをしよう？もうわかってるよ。対処法も」

「さつさと言つてやれ、…まさかお前だつたら、神殺しさせて貰う？」「やつてみな。それで原因は死神の勘違い。氣絶したときそいつの魂が少しのあいだ、浮かび上がつたみたい。幽体離脱とかいう奴。それで間違えて死神が狩つちゃつたんだそれで転生したんだ間違いにきがついたからね死神が

「お前は関係がないと？」

「そう言えば管理してるんだろ？」の世界を。なら分かつたんじゃ
ねえのか！？」

アランも意見を神に言つ

アラン暴走（後書き）

「僕が目を離した隙に入れられたんだ記憶の処理もせずに。あつ、死神がきたよ、弱いしボ「ボボ」にするへ手伝つてやる」「捕獲せよ」

「氣絶させて檻に入れろ」「おわ～、辛口になつてゐる。

「後者を採用する。よし、そ～ら～」「何か悲鳴が聞こえたけどおい」といって。

「対処法をいつてやれ。戻れるんだろう?」「…実行出来るのは魔王が来る3年後、それも倒した後、2人ともその国に飛ばせる」

「条件はなんだ?」「ていうか俺も!?」「条件、神の花を食べろ。それだけ」「神の花?」「そう、魔王が1つ、そして…僕が一つもつてゐる、黄金の小さな花」「じゃあよこせ、」の野郎」「無理、2つ集まつてやつと発動出来る物だから」「そういえば、いつに戻るんだ?」「気絶させられる10秒前、道具ももつてけるし、一度行けば、君のワープで再度行けるおまけ付きだ」「つまり、戻る事も出来るという事か…俺にとっちゃあお得だな」「俺も秀一が来るなら楽過ぎるな」「あ、そなう、君にお詫びとして不老の効果だけ付けておくよ。不死があると色々いわれるだろう、あ、この世界だけだけど」「十分だ。あ、死神バス、再度そつちへとばして消すから」「おお、いいねえ、殺るか!」

「なら、ちょい待ち…おい！」つち逝け！」

「なんですか…！？？！？」

そこに現れたのは小太りで、顔は大きく、背が秀一より低く、誰が
みてもダルマ体形といえよう、男性だった。

「こんな奴にやられたのだと思えばはらわたが煮えたぎる」

「うわ、余裕かまして、甘えん坊が。調教？更生させたる…」

「！？、何々！？」

いまだに状況が把握出来ていない死神。

「「G O T U H E L L ! ! (地獄に行け)」」

パラパラパラパラドゴバラバラドゾズドーン！！

銃と拳と火魔法と爆発の音が部屋に響く。

部屋を犠牲にして：だが。

「グギヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ
ヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
死神は状況を把握する間も無く、天に召されていった。

「ぞこいな」

「ああ」

「そりやそうだ、あいつ二二トだもん。仕事一切しない能無し男だ

から」

「それにしても神ぞこくね？」

「そうだな、どうなつてんだ？」

「みんな、面倒くさがりだから」

「なら、貴様か」

「あつ 本當だ。自滅してゐる、安心しろ、一瞬だ」

チビも召されていつた。

「司惑」

色々と不幸な神であつた：

また、余談ではあるが、部屋を壊した弁償はしつかり払う羽目となつた。二三うな。

急展開過ぎました…

だが後悔はしていない！！

シリフス全然書にんかん

道中之又の藍染の又の青染の染物が然る。是れ共に

判明したこと、新たな謎の術

只今考へ中

これが今を表す言葉。

双方、首を捻つてゐる状態だ。

「うむむ…何だろうかこの術」

「分からん、”技術吸收”つってもな…吸收できんし」

「技術吸收」これが今秀一達の頭を捻らせているスキルの名だ。このスキルはチビ神に能力を付けて貰つた時に付いたらしく、代わりに狂人化を消してステータスに上書きされてそのた。しかし、いくら唱えても発動しないため、使用方法を考え中となつてゐるのだ。

「魔力が足りない?」

「いや、お前の魔力は満タンだ、あいつが今使えないスキルを付けると思つか?」

「なる程、そういう事か、あいつも一応神の端くれだし、それ位考えてるか」

「考へて無きや逆にやばいよ」

「…」

また沈黙が続く、しかしながら5分程で終わつた。

「まさか唱えて使う物じやなかつたりして」

「それも十分に有り得るな、モンスターを倒したら発動なんて?」

「うー、じゃあ、殺つて見よう 捩まれ」

「発音が何か可笑しいぞ、悪い意味の感じがするが、まあいい、擣

まつたぞ」

「意味は合つてるだろ?」

「どーでもいい、避け」

「お前も違う!死ねつづのか!」

「んー、わく」

アランの発言を成立させまいとワープ無咏唱で発動する。

付いた先は2人のスタート地点となつた草原だつた。

「…不幸中の不幸だよな」

「…そうとしか言えまい」

着いた先に居たのは赤黒いゴツゴツとした体を持ち、秀一達の10倍程の大きさを合わせ持ち、口からは火の粉が混じつた息を吐き出す竜がそびえ立つて居た。しかも、距離は20mと離れてもいない。すかさず、秀一はこの竜のステータスを見る。

♪ファイヤードラゴン亜種♪

普通のファイヤードラゴンよりもさらに強力な攻撃力と炎をもつファイヤードラゴンの亜種。羽は発達しているが足は退化していく歩くのがやつと。なので空中にいかれるととも不利だが、一旦地面に叩き落とすと暫く隙が出来る。

属性

炎？龍

攻撃方法

足？爪？ブレス？羽？風圧

：何時もながら調べよつとするものがパパッと出てくる。いい、能力だ。

「しかし、何故、亞種なんだろうか…」

「同感、まだ普通のみたことがねえよ」

「だが弱いみたいだぞ」

「何故？」

「知能が無いようだ…」

ドラゴンはさつきから雄叫び一つ挙げない。気付いていない証拠だ。しかも嫌いな地上に降りてしまつている以上警戒心等がないことが見て取れる。

「力が強くとも、有効に使う事ができないって事か」

「当たりだ、一度掴まれ」

「OK、いいぞ」

「ワープ」

秀一がワープした所、そこにはドラゴンの背中。

「ここから、潰すとか?」

「ご察しの通り、殺つちゃえということです」

「では潰していいか?」

「どうぞ?」自由に

その返答が口からだされた瞬間ドラゴンの背中に大きな真っ赤な十字が出来る。ドラゴンは雄叫びを上げようとするが秀一の頭への3発の通常弾によってそのまま絶命させられる。そして煮えたぎって熱い血液と皮を残し、消滅する。そして秀一はそれらを回収した。そして、アランのステータスを見てあら吃驚。

>アルム?アラン<

省略…

スキル

技術吸収

炎獄十字

省略…

省略をしてスキルだけ見たが1つ増えてしまっていた。確か、基本スキルは1人1つでは無かつたか?

「アラン、炎獄十字と唱えてみて」

「?炎獄十字」

キーワードが唱えられるとアランの剣が赤く光り輝く。

「?これは?」

「木に振り下ろして」

「?????」

アランが振り下ろして見ると木が十字に燃え上り、木炭と化した。

「なる程…」

「????????????? いつたいなにが????????」

「技術吸收、これだよ。お前、敵に十字に斬つてダメージを与えたろ? しかもファイヤードラゴンに」

「そう…だが?」

「どうやらこのスキルは特定の敵を特定の方法で倒す、又はダメージを与えると敵と方法に応じたスキルが貰えるというものみたいだ。さつきはファイヤードラゴン亞種

に十字切りでダメージを与えたから炎獄十字のスキルが付いたんだ。上手く行けば無限にスキルが付くというのだな素晴らしいスキルじゃんかよ」

「とうとう、俺も人じや無くなつたか…」

「いやいや、大丈夫。気にしなければ」

「…チツ」

「舌打ちつて…まあいい、掴まれ」

「…」

アランは無言で掴まつた。

これには流石に秀一も凹むようで。

「…死ね」

少々センチになりながら、アランに手の平を向け、炎を噴いた。

「?! オーバーキルー!!」

威力、通常魔術師の150倍

幸い双方の上半身が黒焦げになる程度で済んだそうですが、着替えて再出発ワープ。着いた先は宿の入口。

判明したこと、新たな謎の術（後書き）

直接部屋に行つて出ると不審におもわれるからだ。

取りあえず入つて部屋へ直行、ベットに「ダーライブ！」…とこく前に色々な実験をすることにした。うん、危険だが色々とだ。

「アラン、こっちカモン」
ちなみにあちらの世界でも英語はあるみたいで、簡単な英語なら通じる。

「なんだ？銃を2丁構えてあかられまに今から撃ちますよ～」
「格好をした秀一さん？」

「うーん、察知力抜群過ぎ、いや、俺の殺気の放ち過ぎか。
「そうそう、死ね」

秀一はそのまま、10発アランに打ち込むが難なくかわされ。
「どこ狙つてんだよ！」

そのまま、普通なら骨が2、3本折れても可笑しくないほどの蹴りを入れられる。

しかし、秀一はよけずにそのまま受け、吹っ飛び、壁にクレーターを作つた。

「いつてえ～」

「無傷だが。

「不老不死か。面倒だな～」

「残念無念、また来年。ドンマイ」

そういうながらも、アランのステータスを見る秀一。

›アルム？アラン？

略。

スキル
技術吸収
炎獄十字

しつこいと思うが略。

「思つた通りだ…」

「何がだ」

「お前、足が軽くなつた気がしないか?」

「…そう言えば前よりはとても軽く感じる」

「脚力補正つつうスキルが付いたんだ。多分、走るスピードとキック力が強くなつてゐんぢやないか?」

「なる程、だが、何故秀一を蹴つて補正が付くんだ?」

「多分、俺の能力が関係してゐる。俺のスキルには無限の才能という万能スキルがある。能力は思い付く限りのスキルを行うことが出来るというもの。多分これはこの能力が能力が決まつてゐる訳では無く、しかもダメージを与えただけだから、弱体化。だから、補正とかはランダムで決まるんだと思つ。殺したら、無限の才能が手に入つたかもな」

「なら、お前を攻撃すると何のスキルがくるかわからんということか」

「いや、攻撃方法で足とかは分かる筈だ」

「なる程、んじゃ、俺にとつちゃ 1石2鳥か!」

「何故?」

「鬱憤晴らしじゃあーーー!」

アランが秀一に向け飛びかかる。

「ぐわーーー! ちよつ、俺はどうでもいいのかーー!」

「どーでもいい

「酷いーーー!」

その後秀一が怒り、スキル>鬼人化<へ>を使い、赤く染まつた手でアランをひねりつぶし、気絶させたのは余談だ。次の話はクエにするつもり。

護衛クエスト?上(前書き)

上は受注?出発。中は道中?バトル。上は依頼主の悲劇と、三本に
します。下はいわゆるバットエンド。

卷之三

二人起床。正確に言えば、アランが10分前に起きて秀一を補正が掛かつたキックで蹴飛ばし、起こした。勿論、ダメージを受けたのは壁だけだが。

「くつそゝ！痛覚鈍いのか！」

「？」
「？」

「」！
—

いや、アランもダメージを喰らつたようだ。

そこらに骨が2、3本落ちている事から、折れた骨が足に突き刺さっていた物と見える。

秀一が気付いて治療。床が血で染まり、赤いカーペットとなつたがアランの傷は塞がつた。勿論床は水魔法と火魔法を駆使して、少々ふやけたり、焦げ焦げになつてゐる所もあるが血は綺麗に取れた。

今日1日何をするか決める小さな会議を始める。

「ニシ」、成「ハ」

まこと 塚なか

ああ、やがてはまたこい何でしわれたな」

「だからなんか売りに行こうと。金がねえし」

実際、食事？宿？服？鍊金術の材料代などで30枚はあつた金貨が今5枚。金欠状態なのである。

「OK、午前は城へ。なら午後は？」

一用意をしてギルバへ行く

「儲け？」

「いや、ストレス発散」

「午後は普通に休んで」「おい ひい！」

小声で自分に合ったスケジュールを入れ、アランの意見を蹴ったの

で頭を掴まれ……

一 意見をけやああああああ！！！」

チエラホホホホン---

尋常に、ない遠て、雪鏡を絞り、力を、力を放され、秀一は処刑され、た、…、よう、に見え。

「……アリスの世界へ」

い強さの反動が襲う。

「ハイ、残念でした」

卷之三

「あつ またムスカになつた

二

何故羽？

一足着て近衛騎士にめぐたうちにされる上

「○×」
ノ
ル

卷之二

緑に輝く羽を付けた雛一とアランが城の諸見の間の天井裏に転移する。

「おおーっと、距離セーフー！」

「おわいわいがくべりー！」

アランはその場に崩れ落ちる。

勿論、騎士が気付いてしまった
「ん? 天井裏に何かいるぞ?」

騎士がそういう、天井の端に剣を投げ刺し、高く跳躍し、剣を掴み、重力に任せ、引っ張り、天井を少し壊す。勿論ほんの少しだ。そしてそこから天井裏へ昇る。すると、1つの物体があった。しかし、人では無く、紙切れだった。勿論何か書いてあった。騎士は下に降りてそれを読む。

「えーっと、なになに、ざーんねーんでしたー、あなたみたいなざこには捕まりませんよーだ。…馬鹿にしてんのか」

騎士は紙切れを破り、ポケットにしまう。そこにまた、客人が現れる。秀一達だ。

秀一サイド

「よし、えーと王への諸見を願えるか？」

いま俺達は置き手紙をのこし城の外に出て、王への諸見を申し込みに来た所だ。今頃、あの近衛騎士は腹を立てているだろう。ククク…

「えーと、たしかに出来ますが…王への用件と面識があるかどうかをお聞きしてもよろしいでしょつか？」

「ああ、行商だ。あと、王とは面識がある。秀一といえば普通に分かつてくれるはずだ」

「分かりました、では、少々おまちください」

うーん、大丈夫だよな？数日しかたつてないのに忘れるはずないよな？

かれこれ5分…

案内人が来た。

「お待たせしました、此方になります」

どうやら思い過ごしだった様だ。良かつた。

「了解しました」

取りあえず、近衛騎士の「機嫌」と、王の状態を伺いに行くか…

諸見の間に着いた。

近衛騎士の「機嫌は…斜め

王は…黒い影に背後をとられ、今にも暗殺されそうな状態、つて口
ラーーー！王死ぬぞこれじや！！

「影分身！障壁、巨大呪縛手裏剣！」

秀一はまず、分身をして、30人程になり、障壁を暗殺者以外に張
つて、全員一斉に影のようない黒い大きな手裏剣を投げさした。
この手裏剣は当たると少しのダメージと共に相手の筋肉に染み込み
固まらせ、動けなくなる。

流石に素早い暗殺者でも29個の手裏剣はかわせず、殆ど喰らつて
しまう。そこに来たのはアラン。首を斬つてとどめをさす。

「スキルが入ってるよ

「何？」

「弱点必中だつて、弱点に必ずあたるんじやね？」

「了解、王をどうする？」

アランは氣絶している王を指差す。

「起こす、悪夢による覚醒」

秀一は唱えた後、王に黒い球を飛ばした。その球は王に吸収された。
しかしあがて、

王の体が黒く鈍く光り、震え始めた。遂には悲鳴をあげはじめた。そして、

「ぐわああああ！」

……覚醒した。

「……あんた、すきが多いよ」

刀を首に突きつけられ。

「なつ、なんだ？……なんだ秀一殿か」

「お前、なんで襲われるんだ？」

「知らん、理由は考え方かん」

「そうか、では、まず、用件なんだが……」

「おう、なにを売つてくれんだ？」

立ち直りは上手いが状況判断は苦手のようだ。この王は、「では、ます、この品物を……」

結果、大儲け。

約、50枚の金貨がてにはいった。暗殺者の件の報酬がはいったから高いのだ、いい商売をした。

いま、ギルドまえ。

もうすでに食糧、水、テントは揃えてる。
後は受注だけだ。

入る、クエスト板に直行。

今は相談中だ。

「これは？寒導草の採取というクエスト

「それは報酬が安いし、氷山までいかなきやなんない、却下」

「んじや、プロミネンスドラゴンの討伐は？」

「それは手頃だが…下手すると、肉を溶かされる」

「…これは？ラナルまでの護衛」

「いいんじゃない？」

「やつと認めたか…」

「では行こうか」

「…ああ」

少し不満が残る秀一ではあつたが了承し、受注する」とした。

「…はい、ラナルへの王の護衛ですね」

「ブウーーー王！？聞いてねえよーーー！」

「…受注は取り消さずお待ち下さりませ」

タツタツタツ…

「取り消せりーーー！」

「おじおじ」

アランは秀一の肩に手を置いてこういった。

「…ドミンゴ」

「…一発なぐりせり」

「無

ボコッ

アランに有無を言わざずアッパーを掛け。しかしアランは判断がおくれまともに臉らつてしまつた。

「こんやろ！仕返してやるーーー！」

続いてアランが顔面に右ストレート。あらひ、秀一の顔面が鼻血まみれに。

「ぐきゃあーーー！」

続いてけつとばす。尚、この喧嘩は双方が倒れる迄続いた。

「えーっと、宜しいでしょうか？」

ガイドさんが戻る時にはそこらはもと通りに修復済み。2人ともだ。

「ああ、いいぞ」

「では、まず、腕輪を」

2人は腕輪を受け取る。

「そして、王なのですが…城迄きてほしいとの事です」

「了解、では行こうか」

「OK、ではあれを」

「ワープ」

秀一達はその場から消え、城の前に転移する。

勿論、ガイドさん啞然。

「はれ? あの人達はどこいった?」

何があつたのか分かる者はギルド内には誰もいなかつた。

予定通り、道中の話。最後、バトルへ。

えーっと、持ち込まれた商談は、
「実はだがあの銃を騎士に使わせて見た所だな、軽々と使いこなし、
しかも何時もより強くなつておつたのだ。だからもしも、戦争が起
きた時の兵士に持たせたいのだ。しかし兵士の半分の量の銃とまえ
の60倍程弾をよこしてくれんか？何しろ、兵士が30000程居
るもん…その代わり報酬は弾むぞ？」
といふ無茶苦茶な物だ。普通ならば、

30000だろ？この半分＝15000丁用意しりつて！しかもこ
んまえの60倍とも行けば、軽く15000を越しとる。何てむち
やくちゃな。出来るが。1日中薬飲んでやり続けければ5時間掛かる
が。

ただし問題は材料。これはどういふじょうか…
(だいぶお困りのようで…)

勝手に人の思考に入り込んでくるなチビ神。
(あはは、ごめんごめん。とりあえずそのことについて助けてあげ
るから時間を止めて)

了解。

「タンマ」

タンマウオッチで秀一が時間を止める。

「よし、このことね。此方で製造できるよ
流石は神。スケールが違う。

「君も出来るけど？製造というスキルもついてる…けど君は不慣れ
だしそもそも魔力が足りない。ランクを最後まで上げたら魔力が無
限になるからその時試して。あ、あと話を戻して、まず王から注文
を聞いて時間を止めて」

「了解、時間を動かす」

「...注文は?」

「銃は撃てれば何でも良い。弾は風と雷と通常を1000000ずつ

橋が違ひ三二一!!

一
桁
多
い
！
！
零
が
多
い
！
！

魔力欠陥で倒れる！！殺す気かあああ！！この王は！

「…………」おうて田畠を上めて

思ひせり三の段元で叫びた
多分時間も重なりた田に豊臣方書札
である。この王は。

ХА? НАННІТЬ АТТЕНННОКОНОНТО

(は? 何いつちゃつてんのこの人)

いやーその代わり、>作造の竜玉<を取つて来て

「サクゾウノリュウギョク? なにそれ?」

「ある龍が極稀にドロップするアイテムだ。この世界での売り値は一國王物」「一星の直」

「うわせろ、一国を動かす程の値だ」

「却下。」の世界にはまだ目撃情報がなくて売れない。しかもその

龍もこの世界にはとても少ない奴で……一発でみつけて倒して。一匹倒したらやばいから

「了解。名前は？」

「固めらな」でよ。キングへトカ？キングデハハハ

- 1 -

風の吹かない筈のこの場所で風が吹いた感じがした。

1

— キング？ テウ？ キングデラゴン。 通称、 金玉龍。 体中金？ 金？ 金？ でそのかわは高値で取引される。 弱点は頭の王冠のような角で壊すと動きが鈍くなる。 またほかの部位も高値で売れ… 「はー！ はー！ 」

「全く、つづやすこ。」の上なにか、「いやあーすーー。」

「んで？ んで？ どこに？」

「自分で探し。アイデアをあげると地形のサーチ」

「地形…か。なる程。おっ、出来た！」

秀一の頭に即座にこの国の地図が浮かび上がる。しかも誰がどこの居る、隠し通路等も分かるとても細かいものだ。勿論モンスターも分かる。

「そろそろ、それで金王龍での世界を範囲検索してみたら？」
秀一がそういうイメージするとあら吃驚。さつきまであつた人のマーク一が全て消えて、火山の方に10程マークが残っていたではないか。そしてその残ったマークを調べると…

› 金王龍 <

持ち物

作造の竜玉

「こんなに出ましたけど。はい、当たりです。

「当たりか。ならそのマークにワープして」

「了解」

秀一の姿はそこから消え、出てきた所は金色のドラゴンの前。

「…あっけない成功のしかだな。取りあえず死んでもらつ」

秀一が言葉を発せられたのはそこまでだった。理由は時間が止まつた世界に大きな雄叫びが拳がつたためである。

その雄叫びが拳がつた方を見ると動いている金王龍が。

何故かと考えようとするが爪を振りかぶつてくるため思考を中止させられる。そこに通信がきた。

「あーすまん、そいつの皮には効果殺しといつスキルがついてて、時間を持ても動くから。んじやんじやねええええ…！ 助けろううう…！」

「ふう。まず弱点をと。

「打ち抜きやあいい！」

機関銃で打ち抜かれたのは角。折れた所で龍の動きがのろくなる。

「次は顔面！」

小さなナイフを数本投げて龍の顔をさらりと醜くする。

「最後は…首！」

秀一は武器を太刀に持ち替え、首を刈りに行く。さながら処刑人のように。

しかし、ドラゴンはそれをすんなり避け、無防備の秀一に突進を食らわす。勿論秀一は避けるすべもなく喰らつた。吹っ飛ばされたいた秀一の着陸地点は溶岩の海。しかしそこに水をかけ、一時的に固まらす事によって溶岩に落下するのを防ぐ。そこか

「アーヴィング」に向か大きく跳躍する。今度は羽を付けてだ。

「やはり甘い！」

今度は胸に太刀を刺しに行つた。それを払おうと爪を振るつたが避けられ、刺される。しかしこれぐらいなら死にはしない。はずだが秀一の狙いはここからだつた。

- ケガで死んで！？

突然、ドラゴンが苦しみ、もがき始めたのだ。勿論秀一が太刀に毒を塗つていたためである。秀一はそんなドラゴンの首を刈つた。ドラゴンの体と首が切り離されるとドラゴンは粒子となつて青紫に透き通つた玉と金の皮を残し、消えた。秀一はそれらを拾い、元の馬車に戻つた。しかし時間が「う」きそうなのでもう一度時間を止める。「う」苦労様。いまから君の亞空間に鉄とミスリルと風と雷魔石を送る。それで作つてくれ」

了解上

一では失礼する」

一
あ
し

通信が切れた後、空間に向かうと…

鉱石がなだれ込んで来た。頭？足？顔面？腕、総数100の傷を負う。一瞬で治癒する。そして、鉱石を整理して製造を始めた。鉱石をてにとり、鍊金。またてにとり鍊金。また鍊金。鍊金、魔力が枯れそうなので薬がぶ飲み。また鍊金…を5時間繰り返した。見事に規定数を鍊金した秀一は外

「えーと出来れば20日以内に」「1日!」な?」

「まあ、いつでも国に送れる」

そのとたん馬車を潰して拳銃と弾の山が現れる。王はそれに目を白黒さる。

「…………なんじやなんじやなんじや………………………………？」

「落ち着け。どうだ。ここで買取るか?」

「… 買い取るがためせろ」

王は銃を一手でひとり、6発、通常弾をリローイングし、秀に向かう。「貴様を出での兼」(トシハシ)となつた。

秀一に弾を打ち込み、高らかに王は笑った。一瞬だけ。「はあ、比^レッダ^レー^ル。三千櫻の者

は死んでくれ三を捕る香港に付せば三の後ろ二黒リ彌が。切

氣付けば王の後ろに黒い影が。勿論3枚にスライスされ、捨てられた。王は氣絶していたので起こして状況を話して貰つた所、操られたのは取引すると言つたあとのようで、そのまま取引はしてあの袋をかつさらつていったよ俺は。これで金には当分困らんなんぐふふ…

「ふう、うつむかへて、」

モンスターの大軍と対局中です。」

モンスターの大軍と対局中です。.

えーと、この事はたゞつて3分間。銃で潰れて馬車が壊滅したこと
に後から気が付いた。

「　　」「　　」「　　」

皆さん！」一緒に口をあんぐりと開け啞然としましたよもう。仕方な
いので歩きで王国
へ行く事になりました。そうして、1分経たない内にモンスターが
たかつて来て…

チユドー――――――――

「そつちやばいって！」

「あーあー」めんよー！

ドーン…！

「ぐぐぐ…」

…今に至る。

「あー！…面倒くせー！…」

いわば、どこからとも無く出ていくしぃつきから量が減らない。そ
りやーじれつたくなるものだ。

「風玉ああああー！」

風玉。投げると破裂し、嵐がでてきて竜巻などで敵を吹き飛ばす代
物。秀一がつかつたときはテントが竜巻で浮いた。

「　　」「ガアアアアアアー！…」「　　」

これにより40体程撃退。だが、モンスター達の行進は止まらない。
いや、さらに酷くなつた。どういう訳かといつと…

「異臭！ゴホッ！ゲハッ！」

「は、鼻が曲がるー！」

「く、苦しい！」

モンスターが死んでも消えない。これが理由だ。いつもならば数秒
で消えるのだが、今倒したモンスター達は全て死体が残り、しかも、

腐敗が速く進み、異臭を放つていてるのだ。しかし何故だろうかといつところで念話が届いた。チビから。

「あーやつてんねー、実はそいつら此方のトラブルで起しつた誤現象くというものでね、済まないけど全て排除しといて！モンスターは出てこないようしたから！んじゃつ！グッドラック！ー！」

何故そんなに当事者が気楽にたかみの見物してんだよし、あいつはまた天に留せるとして、まずはこいつら

「と思えば半分撲滅されてるじゃん」

今の所の軍の状況は半壊状態。最早攻撃が出来ない、ただの肉の塊としかなつていない。あ、また、アランが頭を破裂さした。パーン

だが。行進は止まっていない。繩張りに入ってるからか？ ていうか、中間意識がないのか？ まあいいやぶつ飛ばせば。

勿論、カードで。そうだなあ、衝撃を与えるか。

「カード鍊金。激流葬！隕石に葬り去られろ！！」

蒼い隕石で潰して。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオノン！――――――

唱えると30m程の隕石がモンスターをプチプチ潰して行った。勿論クレーターを作つて消えて行つた。60m、過去最高サイズの物を。そして他に残つたのは赤い無数の花びらと衝撃で気絶した王とモンスターの素材をひたすら剥ぎ取るアランと返り血をたっぷり受け、赤に染まつた秀一だつたとさ。なにそれ、怖い。

さて、5分して……

「おーっ、やつと着いたー。」

「ジ苦労であつた。まず報酬はわしから渡して置く。あと腕輪を触つて、魔力を通して見ろ。」

いわれた通り通して見ると倒した敵の通算が現れたが、明らかに可笑しい所がある。

「あんなに倒したのに合計10体ーー!?

ははは!! 実はそれは粒子を吸収してがんばるんだ。あのとも

事「」

勢一余つで、且、
蹴飛ばしや二脚

「銃も運んどいてくれよーーー！」

捨てセリフ残して王は空の遙か空へ飛び立て遡きました……

はい、これ注文の品。金はもう二つあるから払わなくていいよ。

「アーティスト」

「ぴつたりです。何故そんな

「ああ、あとつたえといて、腹いせに付きましたて貰い有難うと」

……わかりました。

「
」
解
三
次
方
程
法
之
解
法
卷
三

このあと王の腑が煮えたぎつて腹いせに兵士一人銃で撃つてしまつたのは余談である。

「…さて、覚悟はできてるか?」

右は同じく覚悟はしているな？」

「問答無用！神罰、激流葬、サンダー・ボルト、ダスト・ショート、狭

い通路、落とし穴、ラッケホール！！」

神は雷にうたれまくり、隕石にうたれ、弱つた所を蹴飛ばされ、塵
がこびりついた細い穴に落とされ、音に苦しめながらも上に戻ろう
とするが、ブラックホールにすいこまれて天に召した。

「おースツ キリ」
「金もどつさり」
この喜びを心に秘め、今日は床についた。

護衛クエスト？下（後書き）

以上短い駄文でした。

2人、起床。

勿論アランが起きて秀一が蹴つとばしたのだが。
勿論無傷な秀一は朝食の惣菜パンを食べながら、これからどうする
か小さな会議を開いた。何時も一方的なものだが。

「えーっと今日どうしましょ?」

「休みよこせ」

「了解、では金は白銀貨5枚でいいか?」

「十分過ぎだ、それでいいが」

「では予定。個人個人で移動または行動してくれ。夕暮れに帰つて
これる距離なら自由。遅くなるなら次の日には一度帰つてくること。
それでいいか?」

「いいぜ、あと、飯は?」

「勝手に食え、以上」

そう言い切ると秀一は宿からでてつた。

「…?」

残されたのは白銀貨5枚と沈黙のみ。アランはその沈黙を崩し、白
銀貨を持って自らも宿を出た。

秀一サイド

「さて、何をしようかね」

今、俺が居るのはこの国の一一番大きな市場。勿論4分の3が人ゴミ
で埋まつて騒がしい状態だ。そこをかき分けて進むのはとても暑く、
疲れる。

「ふう、やつとついた」

こうして辿りついたのは雑貨屋。もしかしたら元の世界に似た物があるかも知れないからだ。

「広いな、何故つて、半分酒場になつてんのか。道理で人が少ない

んだ」

とりあえず品物を見よつ。酒場にはあとで行く事にしよう。禁句もいわれるだらうから。

「おおーいつぱーある。さて、なにがどれなのか」今、目の前にあるのは粉々になつてゐる白や黒の結晶みたいな物だ。しかも複数。どれかが塩でどれかが砂糖だとおもわれるが、はて、どれだらうか。

5つあるし…消去法使うか。味見出来るか知らんが。

「すいませーんこれ味見さしていくださーい」

そこにいたのは店員であろう40代程の女性。姿的にはどこでもいる平凡な姿だ。絶対、断じて興味は持つてないことは先にいつておく。

「はい、味…見、ですか。どうぞ自由」

ではそうさせて頂こつ。まずは一つめの真つ白の奴。

「んー、甘いけど…渋い」

いわば渋柿である。外れだこれは。

次、2つめ。今度は黒や橙の結晶がまじつてゐる。確か、塩にはこんのがあつた筈だがあどうか。

「…しようつペえー！」

「それは、サン?ソルトといつ、海の水を乾かして作られた塩です。ただし手間が掛かるそうなので代金は高めです」

作り方が同じだ。これは嬉しい事だ。ただひとついえば味が少し濃いがまあ、きにする」とはない。

「いくらだ?」

「はい、此方の器すりきりひとつにつき銅貨3枚になります」

そういうつてだされたのは前の世界の市販の塩の容器と同じ大きさのガラス容器。

俺にしたら安過ぎなんだが。

「3つ買おう」

「では、9枚頂きます」

תְּאַמְּנָה

「毎度ありがとうございます」

さて、次、砂糖だ砂糖。3番は、パツサパサのカツラカラで、味も苦くて、聞いた所によるとクレーフルという果実をすりおろした物を乾燥したものらしい。因みにクレーフルはグレープフルーツの色を緑にしただけで味はグレープフルーツその物でした。勿論お買い上げした。

さて、話が戻れた。次は4番。赤みがまじってるか……

かつ、かつ、かつりや――――――あああああああいいいいいい

レバノンの歴史

衝撃で少を呑くほど辛がるがそこには、

ハバの実^{ハバネロ}、だろ？ 5番！ 5番！

「味が無い」

金鑑 極 量 に さ さ か に

15

「毎度：店も直してくださいね」

あ

氣付けばそこらは火の海。
ありやりやりやりや。
修復で直して逃げ
るか。

「ワープ」

「につ、逃げ：あれ？」

そこには何もかも元に戻った店があつたとさ。

今は店の前を歩き出したところだ。勿論塩とかは畳空間へやつた。じゃまだし。次に来たのは石屋。いや、興味単位で。むつさオンザ

口な店舗だが興味はある。入る。扉の鍵が閉まって中を見れば石なんて無くニタリとニヒルな笑いを見せてよつてくるいかにも弱そう

な「ロツキが3人。罷か。丁度いい。

「おうおひ、おちびちゃんが引つかかるとはねえ…」

力チン

「ぐふふ、ママの所へかえりたいかい? ベビー」

力チカチン

「持つてる金を全部おじさんにくれればお家返送つてあげるよ~子

羊ちゃん?」

力チカチカツチーン!

「…この肩の処理はちょっとすすぎだな」

「おいおい、黙つて聞いて置けば言いたいこと! ってんじゃねえか

糞がき「沸点が低い!」ギャポペエ!!」

盗賊の一人は頭に肘打ちされ絶句、そのまま頭から血を出し気絶。

「黙つて置いて行けば「命を置いて逝つて下さい」シェプウウ!!」

一人目は顔面を殴られ、腹に膝蹴りを入れ

られ抵抗できず、鼻血と命を置いて気絶。

助走を付けて飛び蹴りを最後の心臓にくらわしはじめたおじ瀧した。心臓のあつた場所はドリルが通つたみたいにぽつかり穴が開いている。ご臨終確定なり。また、助走の時、一人を蹴り飛ばし、一人を踏み潰した。飛んだ方は壁にめり込んで、尋常じやない程の血液が

黙つて手を合わせて「」合掌。南無。

最後に石屋を凍らせてまたあるき始めました。あーお腹が減った。
どつかないに行こ。

卷之三

時刻秀一、宿出発1分後。

「さて、どこ行くかね？」

全然違うんだ。どこか所があるのかわからん。まあ、金はあるし適当にやつらにやれば。

「まずはこれを崩そう。これじゃおおすぎで使えない」

白銀貨 これしゃおーりかでねえよな
ビュッ！ ズンガラガツシャーン！！

盗賊が白銀貨を奪いに来るのは仕方ないか
は遊んで暮らせるし。きを付け…

「金がない！！」

あつそうだ。秀一に教えて貰つた簡易探索術を使って見よう。まず、

てに付いた白銀の匂いを覚えて…

「クン、次は、これを頼りに匂いを辿れっていうことだが…あつ、分かるわこれ真っ直ぐ匂いが続いている。おお一使える」

「とりあえず、あついた、ちょいと驚かすか。

「ちょっとそこのナイスガイ」

「ナイスガイって俺のこへグゥウウ…」

エレキボール。3流だなこいつ。とりあえず返して貰つよ。さて、ここは?

→HEYKAMON←

いかねーよ?風俗店だろ?高い声が響き過ぎてる。ばればれ。でも

反対側は…

→矛盾の館←

ほこ?たてと書いて矛盾むじゅんと書くが…はて、武具屋か?それともへんな嘘つきの店か?まあ、入れば分かろう。

「うらうしゃい、多分、迷つたらうがこ」は武具屋だほじたてのやかたと読むぞ、まあ、ゆっくりみていけ

思い過ぎしだつたか。よかつた、良かつた。が。

「あの、此方の扉は?」

「ああ、そつちは酒場。情報屋がいるし、酒も上手いが…夜中営業だからあいてねえよ」

「了解しました」

なる程ねえーではまず武器を、つと。ここにあつて聞いた事のないのは、軽槍?

ああ、細くて軽い槍か。投げるんだろう。大体検討が付くわ。あとは、属性棒?

「ああ、そりや、属性魔力を込めるとそれに応じた色になつてその属性攻撃が出来るこつちや。まあ、簡単に火なら熱く、電気なら痺れ、氷なら冷たい、水なら水滴が飛び散るみたいなしょーもないのしかないけどな!」

なら秀一に改造して貰おう。改造次第で強くなつたりして。

「3本くれ」

「あいよ、銀貨3枚かい払えない、ん?こんな所に銅貨が?ああーつそつだ装飾品を買う時に貰つたなー、これでつと」「ぱつニン、母ち

ひこたし！毎度！」

他は、火炎放射機とかか。興味零。どうか行こ。

「とありやなんだ?氷?家?氷で家が固まつてゐ?いやちがう。廃屋と盜賊が凍てつかれてんのか。どうせ秀一に禁句をいつたんだわ。自業自得、だ。ちがうとここ。つか飯いー、くこに行こ。」

秀一サイド

いまは食い物買いにアーケードモールに来てる所だ。うーんこの焼き鳥もいいがバーガーもなおよろし。うーおおすぎー迷ううー。も

食べて

赤い粉＝ハバの実を粉末にした物。

そこら一帯は一晩大火事だつたそうです
え？俺？出口まで駆け抜けて水を飲んで宿に帰つた。はい、無視し
ましたが？悪魔？ああ、さいですか。

アランサイド

さてここがアーケードモールですか。店と人と…

「火が多いですねー」

火事ですか。では逃_g

アラン、大火傷。宿に帰還すると即刻、秀一を蹴ったとさ。んで火傷の痛みで悶絶 & 気絶。そのままベットへ、もちろん秀一は無傷で頭をポリポリ搔いてから自分も床に付いたと。最後は酷かつたかな？次は迷宮への出発予定。

一回執筆中小説がバツ テリー切れにより抹消されちゃったんでボツ
ロボロかと。

次の日。

秀一、起床。ボンバーへヤーになつてねてるアランに治癒魔法をかけて、置き手紙を置いて宿から出る。ペガサスの靴を履いてスキルの加速力30%アップと脚力増幅を付けてBダッシュ。最早音速越えてます。風が突き刺さる突き刺さる！

おかげで目的地に1分で行けた。そこは、

「酒と話をもらいに行くかね」

……酒場である。昨日の酒場だ。情報屋が少々気になつてたから。酒は…少しね少し。

「うし！あいてるな」

「らつしゃーい。酒ですか？情報ですか？」

「氣さくなマスターだ。こいつのうのは当たりだ。」

「情報かな」

「なら、此方へ」

そうして案内されたところは二階。そこには尖りハットを頭に被つた、中年男が何人もいた。適当に真ん中の所へ。

「らつしゃい、どんな情報が欲しい？」

「ならー」

しまつた。考えてなかつた。まあいい、最近の話を聞こう。

「最近あつた事を3つ」

「よし、なら銀貨6枚だ」

勿論とられるか。定番だな。

「はい」

「毎度！なら1つ。最近、下のランクでAAの100人の盗賊団を

全員殺した新人がいるらしい」

あ、それ俺。有名になつちつたか。言わないけど。

「一つ。迷宮が草原に現れた。今、色んな奴が探求しているだろう。

モンスター や アイテム も 落ちて いる らし こ

…迷宮。あるんだ。是非今日最下層へ行こう。無理か。でもいつ

三〇

「……城に謎の行商人がきて国王相手に取引しているらしい。
かもこれは盗賊を潰したのと同一人物らしい」
俺、どうかしたのか。こんな目立つてしまつて。

「なんだよ、ほーちゃん、顏色が優れち?
?」「じょじょじょじょーだんだつて!」

一気に殺氣を込めたためそこにいた人全員がおじけついた。

命拾いしたねえ」

みんな殺氣に怯えていたのでカクカクカクと震えるばかり。そこを

秀一は通してでしゃた。置き手紙を残して、「ふ、ん、ん、んん? が、な?」の一の邸屋

れたほうがこころよへくはへ、まあかうひじて、じゆおおお——。」

伏せたところから上に矢が刺さってきたではないか。勿論ほかの人二五。最後二列三つ二つは氐ガサ一ハ二。

「今度は？」読んで3秒置きに飛んでおけくはー…」

さて、きたのは熱線。触れれば足が焦げて粉々になる。かすつても

が『実際一人物物にならぬ』と、涙みをかゝして『一瞬で足をもぎ取つていつた。

「？！あ、あ、あ、あ、足が…足が…足が消えた…」

最後には紙か飛んで来た
そこには

「そりや噂の新人の言つた言葉じやねえのか？確かいわれた人は全

員処刑され……」

「もしかして…」

「御本人？」

そういつた瞬間、紙が降つて来た。そこには、
「そうですよ。地獄で悔やめ。残り〇・5秒で逝く電車にのりこめるから」

その手紙はそこにいた人には地獄の片道切符に見えただろう。何故ならそれは室内の人の処刑を意味するのだから…

「…………」

一瞬にして同時に脳天に何かが突き刺さるのがお互い、見えた。しかも自分に来たのが冷たかつたことから氷の塊だと分かつた所で皆の意識は途切れ、永遠に繋がる事は無くなつた。そこにまた手紙が一枚。

「情報、ありがとうございます。向こうでこいつの情報でも話しどきなうと。」

処刑したあと秀一はしたに行つた。アランと置き手紙で待ち合わせておいたのだ。

「…もしかして殺つちゃつた？」

「逝かした。情報聞いてから」

「何の情報だ？ 役に立つのだけ」

「草原に迷宮が誕生したそうだ」

「レッソゴー」

「OK」

秀一達はワープをして草原へ行つた。

このあとマスターが階段で崩れ落ちて転げ落ちるのは違つ話。

「ホワツツ？」

「オー」

そこにあるのは、階段。下へ行く物だろう。ただ、問題が…「魔法式、多重結界錠とか、鬼畜ー！誰だ入つてんのー！」鍵が掛かっている。そういうこと、でも秀一には関係ない。

「オールアンロック」

結界を全て解いた。約30の結界を。

「入るぞ！」

「どうやって解いたー！？」

てけど

- 1 -

レ^レモ^モン^ン

2

中は石みたいなものでできていて、壊れないように無破壊のスキルがついていた。色は青い。それはいい。それはいいが。

一 階 段 が 消 え た — ！ ！ —

一 帰れ
るか

あそが驚く事じゃあ

לְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—יְלְ—

卷之三

「人體編

「み、水をくれ…」

「ワープ不可能。」

「チビ！」

……

音信不通。

「脱出…不可能じゃね？」

「最下層まず行こう。帰れたりして」

「了解。行こう」

地下一階。

「無駄に広い！」

「食べ物、食べ物」

全然、暇、体力が減つていく。飯がくいしたい。

結局そこにモンスターはでなかつた。階段があつたから降りる。

地下一階。

いまいるのは緑のゴブリン。戦つた事は無いが。10匹一緒にこり
れてぞつとしたが。

「HPすくね！」

「殴ると死ぬつてザコだな」

こうして30秒で蹴りがついた。そこには透明な容器に入つた黄色
い液体があつた。サーチしてみると、「ゴブリンオイル」という事がわ
かつた。油はみたことがなかつたので助かる。上手くいけは火を強
く出来る。

そのあとはオーガがでたが瞬殺。アイテムが落ちなかつたのは残念。

階段を降りる。

地下三階。

「えーっとここは？」

「とっても広い、が

「そこの鉄の大きな鳥はなに？」

そこにいたのはあのサスのメタドリーその物だった。光が眩しい。恐らくここが最下層なのである。ちかすぎるが。

「ギヤオオオオオオオオオオオオオオ！」

……どうこやいつてる場合ではないようだ。鳥、接近中。近寄るな、眩しい。

「錬金、シモツチの副作用。発動、それから、ハイパー・ヒール！」

「何考えてる！」

「まあ、みとけ」

こいつは相手が回復するときに代わりにダメージを回復分だけ与える奴だ。だから。

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ダメージを与える。

「なつなにが？」

「アラン！あいつに回復魔法かける！」

「了解！スピル！」

「グガギヤグウウウウウウ！」

回復させる毎にダメージを与える。こいつやあ楽しいわ。あつ、死んだ。

そこには…ステンレスと黄金の玉玉が落ちていた。回収。そこそこ、脱出口が現れる。上へ向く階段だ。

「帰るぞ、疲れた」

「了解」

登ると入る前の所にたつていた。簡単だな。」。

「いぐそ」

「へーい」

そのまま、宿前に転移、といきたいが田玉をつりたいからギルドへ。
んで行く、売る、さられる。結果。
ランクSへ昇格。金貨3枚ゲッヅ。
はやーつーSつて！まだほんのちょっとだよーーきてから。
まあいいや。かえつて糞して整理して鍊金して、寝よ。

就寝。

鍊金をじゆう4（前書き）

今度は4回抹消。全てバッテリー切れによるもの。これが5回目。
言えば仲間が増えた。

錬金をしよう4

起床の時間。

爆音が宿に響く。アランが雷をぶつ放したためだ。その先にあるのは秀一。状態、無傷。秀一、起床。アラン、口が開いたまま塞がらない。今回は飛びもしなかつたからだ。

「荒い、ぬるい、弱い、ざこい！」

「畜生！」

また、アラン、朝の攻撃失敗。

続いて朝の朝食の「ツペパンらしき物と黄色い液体を食べながら、会議を始める。パンは固いが味はピリ辛で、スルメのような味が混じっている不思議な味で、液体はコーンスープかと思いまやレモンジユース。多分100%果実。舌が痺れる！ヒイイイイイイー！」

3分もがいてやっと味が消えた。長持ちし過ぎだこの酸っぱ汁。取りあえず会議。中をすつ飛ばしたら結果は錬金。武器を作れとのこと。強要ですか？

ビリビリリイイ：

はい、強要ですねこれ。髪の毛が……なにをするううう……

ビツシャアアアアアアアン！！

「フギイイイイイー！」

アランの骨が少し透けて見えた。電気ショックだ戯だ。悪魔？はい、さいですか。

ではアランをスケルトンにしたところで錬金を始める。まずは多くなった材料を整理する。

材料（記入漏れ有り）

曲がった木の枝×37

真っ直ぐな木の枝×23

長い木の棒 × 12
短い木の棒 × 21
木の皮 × 45
木の蜜 × 56
木の葉 × 152 (以後省略対象)
魔力 × 9247644644687568546 : (以後省略確定)
竹の棒 × 4
鉄屑 (小) × 365
(大) × 243
鉄棒 × 3
銅 × 43
銀 × 22
金 × 4
白銀 × 2

ただの石 × 563 (以後省略対象)
クリアストーン × 4 (魔法を込めれる無属性の石)
火魔石 × 35
水魔石 × 23
(大) × 1
風魔石 × 29
電魔石 × 19
地魔石 × 49
闇魔石 × 26
魔力石 × 5
生命石 × 3
守護石 × 2
特攻石 × 3
オールクリスタル × 2 (新たに作った)
石炭 × 9575 (省略対象)

神石 × 1 (神属性をオールクリスタルにこめたら出来た)

鉄の剣 × 24 (鉄屑にするつもりなので略対)

銀の剣 × 14 (以下等分)

金の宝剣 × 1 (略)

結界 × (略確定)

ステンレス × 1

ボロボロのモンスターの皮 × 153

(肉) × 32 (取る気になりずらかつたらしい)

薬

疫病 × 21

爆薬 × 24

沼地化 × 12

(底無し) × 31

(毒) × 13

発光薬 × 3

寒冷 × 12

温暖 × 12

弱体化 × 32

縮小 × 26

地殻変動 × 10

地割れ × 5

噴火 × 1

ペインント × 99999999999999999999999999999999... (略確定)

気休薬 × 36632773573694 (買い過ぎ。略)

回復薬 × 686

速足薬 >そくそくやく< × 20

弾々薬 × 15

集団特効薬 × 5

ううん。おおくなつたなー。薬をかつたし同じのも量が増えたから

なー。まあ、減らしていくか。

卷之三

一えーと、疫病と、潰れ易い銅を使つてれーんきん！」

れんギヤアアアアアア

光をまともに食らうからだアラン。とりあえず弾は…

「黒いなやはり」

黒いふつーの弾。まあ、なかでピチャピチャいつてるしねいつてん
だろ？。

さて、次は剣。この世界では銃が弱い。だから銃で誰かに勝つたりしたらさわがれかねん。

は銀と闇魔石、ステンレスを使って…

悲傷様
さて
出来が

金=光とカウントするのか。えー、一つと能力。

氷動の守護僕

四庫全書

持ち主の守備5%アップ

スキル

再生

卷之三

対象技術吸收 > 主 <

卷之三

「一戻二戻、戻三戻で

「さつも心読みよるうへ

「主の技術を『ペーし』るからな、当たり前じや、ついでに言えれば記憶も。

危険だ。壊そう。

「壊しても5秒で再生するぞ?」

参った。畜生。

「潔く負けを認める。主よ、

「何々? 何で剣が喋つてん?」「お前そなたは黙つとけ(とれ)」「へい...」剣に指図されたアランは部屋の隅でちぢくまつた。『ご愁傷様。さて、剣だが:「ノイズという名前があるのだが?」はあ、んまあ、女だろう。ステータス再確認。

›ノイズ‹

所有者 尾崎秀一

属性 光 閻 火 風 時空 空間 回復

耐久力 852684585375824850¥8526845

（略）

スキル

全補正

攻撃50%アップ

無永唱

偽造

錬金

回避率30%アップ

金運

激運

製薬

製造

設計

飛行

思考速転

七転び八起き

変身

…エトセタリ…

おおすぎて読むのが嫌になった。

「なーにいつとるんじゃ主よ、主なんかこれの1000000000倍はあつたぞ？儂なんぞ主の足元にも及ばんわい」

…自分は人間だよな？

「さての、主は四分の三が神になつとるような存在だし、人では無いのは間違いかと思つたぞ？」

「ひ、否定された…」

「しらぬぞわれは」

「ふう、ど、とりあえず、つ、続きを」

「精神的ダメージが深いの」

「ふひやひや」「黙れ！（るがよこー）」「やんやんしゃべらせて

…」

今度はベッドに入った。うーん南無。さて、続いて何を作るつかねえ…

あれから3時間…
できたもの一覧

疫病弾 × 5

疫病爆弾 × 3

疫病の地玉 × 3

銀の剣 × 3

混動の守護剣 × 1 (ノイズ)

特攻の短剣 × 10 (以後、投げナイフ)

強盗ナイフ × 5 (以後、ブーメラン)

神の七つ道具 1、雷空砲

こんだけ。最後のやつで1時間喰つた。最後の七つ道具の1、雷空砲は砲台だけ。ただし、ほんの少しの魔力を込めるとなつまち增幅させて10000倍にし、打ち出す。玉要らずの今世界スタイル。勿論あたつたら半年は痺れが取れないであろう、生きていれば。先に心臓麻痺か、心臓ショックであるよ行きだろ。南無。所有者はアラン、アラン以外が使おうとすると異常状態になる。麻痺から、呪い、最悪精神寄生されて魔力と生命を根こそぎとられる。

疫病の地玉は投げて地面におとすか相手に直接当てるかで効果が違う。地面にやれば5日間半径3kmに無色透明無臭の疫病エリアが広がる。期間は3日、仲間には無効。相手が入つたら疫病に10分で発症し、3日寝込む、症状は胸の圧迫感。息がしにくくなり、時々体中で痛みが走る。直接やると対象以外に移ることはないが対象には不治の疫病が1秒で発症。不治といつても俺は治せるが。症状は精神破壊。手足や体の一部が消えたように感じたり、触感をうしなつたり、体が焼けるように感じたり、凍つつくように感じたり、しまいには、幻覚を見る事もあるが、絶対に死はない。一生苦しみをあじあわせる疫病を発症させる。間違えば仲間にも当たる。こんなもん。少ないやつちや。しかし…

「ノイズ、お前って、消滅することってあるか?」

再生があつても原型を留めないほどされたら、やはり、剣だし。

「無いぞ」

まさかの無敵存在来たああああーーー！

「儂も主がいつている神と同じよ！」

一回天に召すが、1分もすれば全快状態で戻つてこれる、のだが、そのときに少々主の魔力を

拝借することになるの

「およそどれぐらいか？」

「一億かの」

「ブツー！」

アラン、吹き出した。無理もいか。桁が違うもの。

「いいよ、一秒で戻るはそんぐらい」

「ブツツー！」

更に吹き出した。このとき、衝動でアランの頭をげんこつで殴つて床にめりこまして気絶したのは悪くないと思ひ、多分。というかすぐ起きた。

「そうか、なあに一秒で60分の1は回復出来る限りからの、大丈夫じゃ」

「ブフオオオオー！」

はあー。次はノイズに切り裂かれた。が、ライフバッチをもつていいから死の一歩手前で回復し始めた。執念深い生命力じや。あつ、目が開いた。治癒力高！

「OK、さて、アラン、どうする？」

「ふ…ギヤアアアアアアアアアアーーーあちいよーーあちいよーー！グギヤアアアアアアアアアアアーー手足がああああああああーー俺の手足はどこだよおおおおおーー！」

「疫病の地玉潰したな」

もがくアランの背中には紫の液体がべつひとつ。治癒はしておいてやうう。この鈍感野郎に。

-起床-

ドッカーン！

「のわ～つー？？」

…部屋の爆発と共に。

「ちょっと…部屋爆破は流石に死ねるぞ」

「なんだ不老不死」

「仰る通りで…」

恒例となりかけているアランによる朝の秀一攻撃。元はスキル入手の為だったが今は…

「オラオラオラオラ…！」

「無駄無駄無駄無駄…！」

…アランのストレス発散と秀一の回避経験値入手という目的が入り、更に女将さんを困らせていいよつた。2人は気づいていないようだが。

「しゃらくせい！」

「ぎょおーー！」

アランの右横腹に右フック命中。見事に内臓が潰れ、口から血を吐き散らし左側ソファもどきに御着席。そして肘置きに手が落ちる。

「ホールインワン！フォーーーー！」

「ーーーーー！」

声にならない声でアランが声を上げ、倒れた。ソファの座る所が血に染まる。

「つぎやーーー治療！治療ーーー！」

？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

?

朝をすつ飛びし、昼。

「ん、お前のや〜...」

まあまあ、治つたからいいんじゃないのよ

一
痛
し
一

男の子たる我慢の力

卷之三

卷之三

まゝ心れかう

議を実行。

先程【やがまし〜!!】と申されましたノイズ様 今日1

國學研究會

実質、騙されるしな。被害経験あるから、ちつさな詐欺みたいなんで小遣い何回絞りとられた事か。

「これヤバきゃあなら俺の身が精神的にはヤバい！」
秀一「よし、久し振りにギルドハグか！」ち

二、」批評

そん……おいでかんとくわー！」

ノイズは無視する事にしました でも不吉、といつより不潔…いや、間違い…あーつ…！もうどーてもいい…！不吉な予感が…

「ほらね

「え？」

ギルドで鉄檻が落ちて俺らを捕まえるつてビーよ！？「これ？

「まあ、抜け出すのにはかかるか。アラン、田舎どじとけ！？」

「へえ！」

「鍊金！鉄檻 拳銃 + 通常弾！」

「ぐおつ！」

今頃上ではムスカが何人もいるだろ？。よし、リロード完了！

「フルバーストじや！喰らえ！」

今入っていた12発が一瞬にして、一斉に撃たれた。勿論狙い等無い。いくら強くともあたらなくては意味は無い。だからここに色々するのが秀一だ。

「タンマ、

痛覚耐性！ジャーンプッ！

時間が止まつた世界（以後停止世界）ではすべてが停止し、うごかなくなる。しかし、入った者はそれらを動かす事ができる。しかし、例外として、破壊しない限り動かせない例がある。その例の一つとして、一切、地面に触れていない物だ。落ちる事も飛ぶ事もない。ただし、魔法などの痛みを感じる物は触ると痛みを現実世界と同じように感じる。停止世界ではあくまでも物が止まるだけなのだ。

「うー、やはり、ピツと痛みはあるが…突き抜けないよりました」秀一は何をしたのかというと、上に向けて撃つた弾をよじ登つ正在つてゐるのだ。ギルドの天井は30mくらいはあつて跳ぶには足りない。だからだ。はやいとこ言えばロープ代わりだ。

「よしつ登りきつた。えーっと…あれ？騎士？城の…取りあえず

拘束して事情聴取（尋問）しようか

？？？？？？？

？？？

？？？

？

「…あれ？ なんで我々は縄… ギヤアアア」

「話をきかせてもらおうか」

首に火を纏つた剣を突きつけたらかくかく頷いてくれた。いい子だ。

「脱城姫探索隊？」

「はい。姫が脱走しまして」

囚人扱いだな、姫。

「なつかなか見つかりませんので助つ人としてあなたをと
「それで檻ですか、俺にはききませんよあんな物」
「それで、助けて貰えませんか？」

「報酬」

「金貨10枚で…」

「乗つた～！！」

取りあえず、金貨10枚として付き合つ事にした。

「くくく… 嵌つたぞ」

そのとき、騎士の口元が上に上がりニヤリと笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2595w/>

異世界少年

2012年1月8日23時53分発行